國文新副讀本　上卷

4a
810
大14

41469
教科書文庫
4
810
41-1925
20000
90683

資料室

4a
810
大14

文部省檢定濟

大正十四年十一月二十四日　中學校國語科教科書

東京帝國大學教授　文學博士　藤村　作
東京帝國大學助教授　文學士　島津久基　共編

國文新副讀本

東京　至文堂

中等教科書協會

廣島大學
教
90683

凡例

一國文新讀本は國民普通教育の正當なる任務を稽へて編纂したものである。然るに今の中學校の教育は普通教育であると共に、實際に於ては高等教育の豫備教育でもある。この二道かけた現狀は、四圍の狀況から已むを得ないものとされてある。近き將來に此の情態を脱し、それから受けてゐる諸の弊害を一掃すべき改善の行はるべしとは豫言し難い。勢、中學教科書には現狀に對應すべき適宜の處置が採られなければならぬ。本副讀本の編纂は、かくして教育界の現狀の實に已むを得ざるに出でたものである。この已むを得ざる必要に應ぜんとする點に於て、國文新讀本の缺を補はうとするのである。

一いかに現下の已む事を得ざる必要に應ぜしむべきものであるとはいへ、

無意味に古文を竝列した編纂ぶりでは、その講讀に費さるべき貴い勞力と貴い時間は餘りに物體なさ過ぎる。本書は以上の目的に添はしむると共に、國民生活に資すべき國民精神と、古文學の性質・價値との理解に適切ならしむるやうに編纂方針を定めて、書に由り人に由りて、文章の配列を行つたのである。

一此の方針の下に、上卷(第三學年用)に於ては、軍記中の傑作平家物語を中心として、これに保元・平治の二物語を配し、これを以て時代精神の主流の一面を理會せしむることにした。中卷(第四學年用)に於ては、神皇正統記を中心として根强い傳統的精神を了解せしめ、時代思想の主流の他の一面に十分に觸れしめることとした。なほ徒然草抄を入れて以上二面の外に、複雜なる流の存したことを知らしむるよすがとした。下卷(第五學年用)に於ては、傳統的精神の凝結して成つた國學思想の流を汲ましむべき擬古文を、本居宣長を始めその最も秀れた人々について集めた。

一古代文學を講讀し鑑賞せしむるには、それ等が我々の祖先の靈の表現であることに十分の敬意と愛情とを以て臨ましめ、又自然に祖先の心に浸らしめることが肝要であるが、今の若い人達の心は、それ等と可なり大きな隔たりを有つてゐるものであるから、豫め古代精神・古代文學の何物たるかに就いて一般の知識を有たしめることを利便とすることが多い。これを考へて、本書には現代學者の論說を細字に印刷して添附してある。しかも、それ等は讀本の一課として十分の効果を有ち得るやうな名家の文を採つてある。

一第一・第二兩學年用の卷を缺くことゝしたのは、せめて此の二學年間は生徒をして純に普通教育の正當な目的・方針の下に活動させたいといふ編者平生の主張の存する爲である。

大正十二年十一月

編者

國文新副讀本　上卷

目次

軍記概說……芳賀矢一……一
保元物語
一　新院御謀叛思召し立つ事……八
二　義朝幼少の弟悉く失はるゝ事……一四
平治物語
待賢門の戰……二四
平家物語評論……藤岡作太郎……三三
平家物語
一　祇園精舍……四一

二　殿上の闇打……四三
三　殿下乘合……四九
四　大教訓……五五
五　有王島下り……六六
六　少將都還……七八
七　渡邊競……八四
八　三位中將……九二
九　壇の浦……九六
一〇　六代……一〇七

目次終

國文新副讀本　上卷

文學博士　藤村作
文學士　島津久基　共編

軍記概說

芳賀矢一

抒情詩に始まりて叙事的小說と發達せし國文學の趨勢は、鎌倉・室町の近古時代に入りては、更に劇詩的方面の發達を促し來れり。上流女子の彩管に成りて、宮廷の間に弄ばれし物語草紙は漸く變じて、國民的文學の傾向を帶び來らんとす。平安朝に於て全くその領域を異にせし漢文と國文とは次第に相混和し、外來文化の感化と國民本來の特質とが一層相融會せること、政治・法律より風俗習慣美術・宗教皆然らざるなし。華奢は變

じて質素となり、柔艶は變じて剛健となり、繁文縟禮は廢せられて、簡易直截となり、昨日まで虛榮を逐ひて權門に趨りしもの、今は名利を棄てて山野に放浪する風となれり。延喜帝がわざと時平の華美を戒め給ひしは何等の効ありきとも見えざりしが、頼朝が俊兼の小袖の褄を截ちしは永く衣服の制をも變化したりき。主殿寮松明を奉ること年々多かりし當時に比ぶれば、幕府の公問所は裁決流るゝが如く、國民寃聲を絶てり。大寶令のくだ〳〵しき適用は僅かに貞永式目の百箇條に收めらるゝ事となりて、征夷大將軍が明治維新の際に至るまで大權を掌握せしもの、亦實に國民精神上の一大變動その主因をなせりといはざるべからず。繁を棄てて簡を採り、冗漫を避けて簡明を主とし、虛飾に遠ざかりて實用を旨とし、浮華を排斥して摯實を遵奉せしは當時の國風をなし、武士道之を基礎として發達しぬ。近古文學は實にその表現に外ならず。

近古時代を文學的に代表する最初の作物は、尙叙事詩の種類に屬せる軍記物語なり。これ平安朝の女流の物語の一變せるものなり。女流の宮廷間に於ける情態を空想的に記述せる假構物語は、實際の記述を主とせる歷史物語となり、更に轉じて戰爭の記事を主とせる軍記物語となれるなり。男女間の樣々を寫し來れる物語は、こゝに於て主從の義理、父子の親愛、武士の種々の境涯を寫すこととなれるなり。前者に於ては年中行事の平和を記し、後者に於ては戰場爭奪の修羅を記す。かれに於ける葛藤は情の結果にして、これに於ける波瀾は戰亂のための愛別離苦なり。彼の主人公の宿世は自ら招ける所にして、此の主人公の運命は時世之を然らしめたるなり。前者の主人公は感情よく意思を支配する能はず、後者の主人公は意思よく感情を支配す。讀者は前者に於ては情緒の活動に同情し、後者に於ては情緒の壓抑に同情す。全體の境遇よりいへば前者は富貴繁榮にして美むべきもの多く、後者は落魂數奇にして悲しむべきもの多し。一は樂天的にして、一は厭世的なり。その對照は實によく

平安朝と鎌倉期とを反映せるものといふべく、鎌倉文學をして此の絶好材料を得しめたるものは、卽ち保元・平治以來の源平二氏の轉變倏忽定まりなかりし運命の歷史に外ならず。

保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記等の軍記物語は、我が國民の有せる最大叙事詩といふべく、その後世の文學に影響せること平安朝の物語にも過ぎたり。何れも戰爭の起因より叙し、時世との關係を記せば單なる戰鬪の記事に止らずして、讀者をして直ちに其の時代の一般情態を想起することを得しむるは、眞箇の史筆に近きものありといふべし。宮廷の事情のみを叙べたる平安朝の歷史物語に比ぶれば、却て數等の上に在り。古來これを以て歷史の參考書として珍重したるも、亦故ありといふべし。然れどもこれ等の書は皆文學的の書にして、決して眞正の歷史に非ず。史界に新研究の起ると共にその史料としての價値は失はれたれど同時に文學的價値は一層增大せるかに覺ゆ。戰亂は人事の變にして、榮枯忽ち其の處をかへ死生朝夕をわかたず。君父の恩義、妻子の羈絆、何れか斷腸の基たらざる。軍記物語はよく武人の戰場に於ける武勇の活動を寫し出せるのみならず、又其の常人としての情緒をも現し得たり。戰袍忽忙の際尙其の人情を到る處に發揮し、又詩歌・音樂の風流を棄てず、武士のなさけは全篇を通じて躍動す。これその乾燥無味なる軍日記と大差ある所以にして、この點に於てホーマーの大叙事詩を讀む感あらしむるなり。而してホーマーの詩の情事をのみ主とせるに反して、軍記は道德節義これを一貫し、理想的武士の面目を躍如たらしめたり。軍記の國民に愛玩せられたるも故ありといふべし。後世の武勇傳說が實に源平時代を以て中心とするに至れるも、亦これが爲なり。

軍記物語は其の內容に於て、よく武士の武勇節義と情緒・風流との兩面を表現し、兩者錯綜して全體の美を構成し得たり。文辭の方面に於ても亦これと同じく、漢文の剛健なる要素と國文の優麗なる性質とは、相調和し

て全豹の美を作れり。漢語は促音・長音・濁音等多く、單語として既に音の變化に富む。平安朝の物語には漢語を日本化せしが、その分量は極めて尠し。試みに源氏物語桐壺の卷を通算するに、百五十餘の漢語を含めり。保元物語は一丁にして四十以上に及べり。「重大ノ」「歴代ノ」「奇怪ノ」「一定ノ」「神妙ノ」の如き形容詞、「入洛ノ上」「晏駕ノ後」「下向ノ路スガラ」の如き名詞、「處・間・上の副詞的接續詞、「何ゾ」「況ヤ」「總ジテ」「就中」「以テノ外」「隨分ニ」「全ク以テ」の如き副詞等、語彙の性質は全く平安朝の物語とは一變せり。「就テハ」「於テハ」「以テハ」の如きは、已に助詞として用ひらる。平安朝の「いと」「いたう」を連用し、が・に・をの接續詞をのみ用ひたるものに比しては、音調の上に於て已に一段の強みを覺ゆ。國語に於て「成ツタリケル」「金物ウツタル」の如き促音「ヨッ引イテヒャウト射ル」「カッウハ今日ノ面目」の如き長音・促音の變化も、亦その勢力を增すものといはざるべからず。これ等は單語の論なれども、句法に於ても漢文訓讀其の儘の形なるものも尠からず。蓋し

漢文軍日記の祖ともいふべき將門記等には、四六文の對比を用ひたる箇所最も多し。故に軍記物語に於ても、叙景の文句、戰鬪の記事に於て、乃至は人物の對話中に於て、その送假名を省けば直ちに立派なる四六文になり得べき箇所尠からず。句法緊縮して冗漫に陷らず、最もよくその内容に相應せり。しかも亦一方風流韻事を寫すに當りては、純國文の優麗閑雅なる句法を棄てずして、よく歌物語の半面を存し、或は勁健に、或は優麗に、姿致極めて多し。男子の語と女子の語とはよく調和して用ひられたりといふべく、語を換へて言へば漢文と國文との調和茲に成れるなり。四六駢驪文は一種の韻文にして、對比の語句を用ふるを常とす。これを作るや、博く古典の事物を引用して、語々句々彫琢をこれ事とす。軍記物語の文は卽ちこれを承けて、對偶の句を成す事最も多し。一事を叙ぶるにも必ず類例を古代に求めて、昔は何、今は何と比較するなり。或はこれを他國に求めて、漢土の何は、天竺の何は、日本の何はと對照するなり。讀

者をして古今東西の事例に俯仰感懷を催さしむるなり。雷に一句一節の上にこれを對照せるのみならず、更にこれを擴張しては一章一篇にも及ぼし、叙事の説話は直ちに支那・印度の類例の叙述に入ること、平家物語・太平記等比々皆然らざるなし。（國文學歴代選）

保元物語

一　新院御謀叛思召し立つ事

新院、日頃思召しけるは、昔より位を繼ぎ禪を受くること、必ず嫡孫にはよらねども、その器を選び、外戚の高卑をも尋ねらるゝにてこそあれ。これは只當腹の寵愛といふばかりを以て、近衛院に位をおし取られて、恨深くて過ぎし所に、先帝隱れ給ひぬる上は、重仁親王こそ帝にそなはりたまふべきに、思の外に又四宮に越えられぬ

新院崇德
先帝近衛
鳥羽74 ― 後白河77 ― 崇德75 ― 重仁
近衛76
四宮後白河

ることこそ口惜しけれと御憤ありければ、御心のゆかせ給ふこととては、近習の人々と如何にせんずるぞと常に御談合ありけり。

宇治左大臣頼長と申すは、知足院禪閤殿下忠實公の二男にておはしまします。入道殿の公達の御中に殊更愛子にておはしましけり。人柄も左右に及ばぬ上、和漢共に人に勝れ、禮儀を調へ、自他の記錄に暗からず、文才世に知られ、諸道に淺深を探る、朝家の重臣、攝籙の器量なり。されば御兄の法性寺殿の詩歌に巧にて、御手跡のうるはしくおはしますをば譏り申させ給ひて、「詩歌は閑中の弄なり、朝家の要事に非ず。手跡は一旦の興なり、賢臣必ずしも是を好むべからず。」とて、わが身は主と全經を學び、信西を師として、しづかに學窓に籠りて、仁義禮智信を正しくし、賞罰・勳功を分ち、政務をきりとほしにして、上下の善惡をただされければ、時の人惡左大臣とぞ申

自他日本と支那
法性寺殿藤原忠通
全經經書
信西藤原通憲

しける。

諸人かやうに恐れ奉りしかども、眞實の御心向は極めてうるはしくおはしまして、怪しの舍人・牛飼なれども、御勘當を蒙る時、道理を立てて申せば、細々と聞召して、罪なければ御後悔ありき。又禁中陣頭にて公事を行はせ給ふ時、外記官吏等を諫めさせ給ふに、過たぬ次第を辨へ申せば、わが僻事と思召す時は、忽ちに折れさせ給ひて、御怠狀を遊ばして彼等に賜ふ。恐をなして賜はらざる時は、「わがよく思召す怠狀なり、只賜はり候へ。一の上の怠狀を以下の臣下取傳ふること家の面目にあらずや」と仰せられければ、畏まりて賜はりけるとかや。眞に是非明察に、善惡無二におはします故なり。世も是をもてなし奉り、禪閤殿下も大切の人に思召しけり。

久安六年九月二十六日氏長者に補し、同じき七年正月十日、内覽の

内覽の宣旨　奏書以前、其文先見關白一謂之內覽、蒙此宣旨、內覽宣旨。（禁中名目抄の註）

宣旨を蒙らせ給ふ。攝政關白をさしおきて三公內覽の宣旨是ぞ始めなると、人々かたぶき申されけれども、父の殿下の御計らひの上は、君も强ちに仰せらるゝ仔細もなし。この大臣とても必ずしも世をしろし召すまじきにもなければ、諸臣も是を許し給ひけり。法性寺殿は只關白の御名ばかりにて、よその事の如く、天下の事においていろはせ給ふ事もなかりしかば、殊に御憤深くて、當今位に卽かせ給ひて、世淳素に復るべくは、關白の辭表をさまるか、又、內覽・氏長者、關白につけらるゝか、兩樣共に天裁に在りと、頻りに申させ給ひけり。この關白殿は萬なだらかにおはしませば、人皆譽め奉りけり。關白殿と左大臣殿とは御兄弟の上、父子の御契約にて禮儀深くおはしましけれども、後には御中惡しくぞ聞えし。されば左大臣殿思召しけるは、一院隱れさせ給ひぬ。今新院の一宮重仁

親王を位に卽け奉りて、天下をわがまゝに取り行はばやと思立ち給ひければ、常に新院へ參り御宿直ありければ、上皇もこの大臣を深く御憑みありて仰せ合はせらるゝこと懇なり。

或夜、新院、左大臣に仰せられけるは、「そも〳〵、昔を以て今を思ふに、天智は舒明の太子なり、孝德天皇の皇子、その數おはしましかども、位に卽き給ひき。仁明は嵯峨第二の皇子、淳和天皇の御子達を閣きて祚を踐み給ひき。花山は一條に先立ち、三條は後朱雀に進み給ひき。わが身德行なしと雖も、十善の餘薰に應へて、先帝の太子と生れ、世澆薄なりと雖も、萬乘の寶位を忝くす。上皇の尊號に連なるべくは、重仁こそ人數に入るべき所に、文にもあらず、武にもあらぬ四宮に位を越えられて、父子共に憂に沈む。然りと雖も、故院おはしましつる程は、力なく、二年の春秋を送れり。今舊院登遐の後は、われ天下を奪はんこと、何の憚かあるべき。定めて神慮にも叶ひ、人望にも背かじものを。」と仰せられければ、左府もとよりこの君代を取らせ給はばわが身攝籙に於ては疑なしと悅びて、「尤も思召し立つ所然るべし。」とぞ勸め申されける。

仙院（仙洞に同じ　鳥羽院）

新院、この御企なりければ、鳥羽の田中殿を出でさせ給ふべき由を仰せられけるに、何と聞き分けたる事はなけれども、いかさま、事の出で來べきにこそとて、京中の貴賤・上下、資財・雜具を西東へ運び隱す。門戸を閉ぢ、人々は兵具を集めければ、「こは如何に、たとひ新院國を奪はせ給ふとも、仙院晏駕の後、僅かに十箇日の中にこの御企、宗廟の御はからひも計り難く、凡慮の推す所然るべからず。この程は雲の上には星の位靜かに、境の中には波風も收りたる御代に、かく切つて續いだる樣に騷がしく亂るゝことの悲しさよ。」と、人々

歎き合へり。（卷一）

二　義朝幼少の弟悉く失はるゝ事

秦野次郎（名延景、義朝の臣）
六條堀河の宿所（爲義の邸宅）
四人（乙若・龜若・鶴若・天王）
舟岡（舟岡山　山城愛宕郡に在る）

さる程に、內裏より卽ち義朝を召され、藏人右少辨資長朝臣を以て仰せ下されけるは、「汝が弟どもの未だ多くあるなるを、縱ひ幼くとも、女子の外は皆尋ねて失ふべし。」となり。宿所に歸つて秦野次郎を召して宣ひけるは、「あまりに不便なれども勅諚なれば力なし。母か乳母か懷きて山林に逃隱れたらんは如何にせん。六條堀河の宿所に在る當腹の四人をばすかし出して、相構へて道の程詫びしめずして、舟岡にて失へ。」とぞ聞えける。延景難儀の御使かなと心憂く思へども、主命なれば力なし。涙を袖に收めつゝ、泣く〳〵輿を舁かせて彼の宿所へぞ赴きける。

入道殿（爲義）
頭殿（義朝　爲義の子）
北山雲林院（山城葛野郡衣笠村に在る）
羊の歩（屠所の羊といふに同じ）

母上は折節物詣の間なり。君達は皆おはしけり。兄をば乙若とて十三、次は龜若とて十一、鶴若は九つ、天王は七つなり。この人々延景を見付けて嬉しげにこそありけれ。「秦野次郎、入道殿の御使に參つて候。殿は十七日に比叡山にて御樣を變へさせ給ひて、頭（カウノ）殿の御許へ入らせ給ひしを、世間も未だつゝましとて、北山雲林院と申す所に忍びて渡らせ給ひ候が、君達の御事覺束なく思召し候間、御見參に入れ奉らん爲に具し奉つて參らんとて、御迎へに參つて候。」と申せば、乙若出合ひて、「誠に樣變へておはしますとは聞きたれども、軍の後は未だ御姿を見奉らねば、誰々も皆戀ひしくこそ思ひ侍れ。」とて我先にと輿に爭ひ乘られけるこそあはれなれ。是を冥土の使とも知らずして、各輿共に向ひつゝ、「急げや急げ。」と進みける。羊の歩み近付くを知らざりけるこそはかなけれ。大宮を上

八郎御曹司（爲朝）
四郎左衞門（頼賢）
九郎殿（爲仲）
五人（右二人の兄弟の外に頼仲・爲宗・爲成）
下野殿（下野守義朝）

りに舟岡山へぞ行きたりける。

峰より東なる所に輿舁きすゑて、如何せましと思ふ所に、七つになる天王走り出でて、「父は何處におはしますぞ。」と問ひ給へば、延景涙を流して、暫しは物も申さざりしが、やゝあつて、「今は何をか隱しまゐらすべき。大殿は頭殿の御承りにて、昨日の曉斬られさせ給ひ候ひき。御舍兄たちも、八郎御曹司の外は四郎左衞門殿より九郎殿まで、五人ながら、ゆふべ此の表に見えて候山本にて斬り奉り候ひぬ。君達をも失ひ申すべきにて候。相構へてすかし出しまゐらせて、詫びしめ奉らぬやうにと仰付けられ候間、入道殿の御使とは申し侍るなり。思召す事候はば延景に仰せ置かせ給ひて、皆御念佛候べし。」と申せば、四人の人々是を聞き、皆輿より下り給ふ。

九つになる鶴若殿、「下野殿へ使を遣はして、如何に我等をば失ひ給ふぞ。四人を助け置き給はば、郎等百騎にも勝りなんずるものを。此の由申さばや。」と宣へば、十一歳になる龜若、「誠に今一度人を遣はして、慥に聞かばや。」と申されける所に、乙若殿生年十三なるが、「あなる心憂の者共のいひがひなさや。我等が家に生るゝ者は、幼けれども心は猛しとこそ申すに、斯く不覺なることを宣ふものかな。世の理をも辨へ、身の行末をも思ひ給ばば、六十になり給ふ父の、病氣によつて、出家遁世して、憑みて來り給ふをだに斬る程の不當人のまして我々を助け給ふ事あらじ。あはれはかなき事し給ふ頭殿かな。

是は清盛が和讒にてぞあるらん。多くの弟を失ひ果てて、只一人になして後、事のついでに滅さんとぞ計らふらんを曉らず、只今我が身も失せ給はんこそ悲しけれ。二三年をも過し給はば、幼かり

しかども乙若が、舟岡にて能く言ひしものをと、汝等も思ひ合せんずるぞとよ。さても下野殿討たれ給ひて後、忽ちに源氏の世絶えなんことこそ口惜しけれ」とて、三人の弟たちにも、な歎き給ひそ。父も討たれ給ひぬ、誰か助けおはしまさん。兄達も皆斬られ給ひぬ。情をも懸け給ふべき頭殿は、敵なれば今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。然れば命助かりたりとも、乞食流浪の身となりて、此處彼處に迷ひ行かば、あれこそ爲義入道の子供よと、人々に指を指されんは家の爲にも恥辱なり。父戀ひしくば只西に向つて、南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、父御前と一つ蓮に生れ合ひ奉らんと思ふべし」と、おとなしやかに宣へば、三人の君達各〻西に向つて手を合せ、禮拜しけるぞ哀れなる。是を見て五十餘人の兵も皆袖をぞ濡しける。

此の君達に各〻一人づつ傅ども附きたりけり。内記平太は天王殿の傅、吉田次郎は龜若、佐野源八は鶴若、原後藤次は乙若殿の傅なり。差寄つて髪結ひ上げ、汗拭ひなどしけるが、年來宮仕へ、朝夕に撫でばだけ奉りて、只今を限りと思ひける心どもこそ悲しけれ。されば、聲を擧げて叫ぶばかりにありけれども、幼き人々を泣かせじと、抑ふる袖の間よりも、餘る涙の色深く、包む氣色もあらはれて、思ひやるさへ哀れなり。乙若延景に向つて「我こそ先にと思へども、彼等が幼心に、怖ぢ恐れんも無慙なり。またいふべき事も侍れば、彼等を先に立てばや」と宣ひければ、傅ども「御目を塞がせ給へ」と申して皆退きにけり。即ち三人の首前にぞ落ちにける。乙若これを見たまひて、少しも騷がず、「いしう仕りつるものかな。

我をもさこそ斬らんずらめ。さてあれは如何に。と宣へば、ほかゐを持たせて參りたり。手づから此の首どもの血の附きたるを押拭ひ、髪搔撫で、あはれ無慙の者どもや。かほどに果報少く生まれけん。只今死ぬる命より、母御前の聞召し歎き給はん、其の事をかねて思ふぞたとしへなき。乙若は命を惜しみてや、後に斬られけると人言はんずらん。全く其の儀にてはなし。かやうの事をいはんにつけても、又我が斬られんを見んにつけても、泣き止りたる幼き者の又泣かんも心苦しくて言はぬなり。母御前の今朝八幡へ詣で給ふに、『我も參らん』と申せば、『皆參らん』といへば、具せば皆こそ具せめ。具せずば一人も具せじ。片恨みに。とて、我等が寢たる間に詣で給ひしが、下向にてこそ尋ね給ふらめ。我等斯かるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず、形見をも進らせず。

只入道殿の呼び給ふと聞きつる嬉しさに、急ぎ輿に乘りつるばかりなり。されば、これを形見に奉れ。とて弟共の額髪を切りつゝ、我が髪を具して、もし違ひもやせんずるとて、別々に包み分けて、各其の名を書附けて、秦野次郎に給ひけり。「又言葉にて申さんずるやうはな、今朝御供に參りなば、終には斬られ候とも、最期の有樣をば互に見もし、見えまゐらせ候はんずれども、なか〳〵互に心苦しき方も侍らん。御留守に別れ奉るも、一つの幸にてこそ侍れ。此の十年餘りの間は假りそめに立ち離れまゐらすることも侍らぬに、最期の時しも御見參に入らねば、さこそ御心にかゝり侍るらめ。なれども且は八幡の御計らひかと思召して、いたくな歎かせおはしまし候ひそ。親子は一世の契と申せども、來世は必ず一つ蓮に參り逢ふやうに、御念佛候べし。とて、今は此等が待遠ならん。疾く

〳〵」。とて三人の死骸の中へ分入つて、西に向ひ、念佛三十遍ばかり申されければ、首は前にぞ落ちにける。

四人の傅ども急ぎ走り寄り、首もなき身を抱きつゝ、天に仰ぎ地に俯して喚き叫ぶも理なり。眞に涙と血と相和して流るゝを見る悲しみなり。内記平太は直垂の紐を解きて、天王殿の身を我が肌に當てて申しけるは、「此の君を手馴れ奉りしより後は、一日片時も離れ參らすることなし。我が身の年の積ることをば思はず、早く人と成らせ給へかしと、明け暮れ思ひて育みまゐらせ、月日の如くに仰ぎつるに、只今斯かる目を見ることの心憂さよ。常は我が膝の上にゐ給ひて、髭を撫でて、何時か人と成りて、國をも莊をも設けて、知らせんずらんと宣ひしものを、假寢の寢覺にも、内記々々と呼ぶ御聲耳の底に留り、只今の御姿幻にかげろへば、更に忘るべしとも覺えず。これより歸りて命生きたらば、千年萬年を經べしや。死出の山、三途の川をば、誰かは介錯申すべき。恐ろしく思召さんにつけても、先づ我をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らん」といひも果てず、腰の刀を拔くまゝに腹搔き切つて失せにけり。恪勤の二人ありけるも、幼くおはしましかども、情深くおはしつるものを、今は誰をか主と賴むべき」とて刺し違へて、二人ながら死にけり。是等六人が志類なしとぞ申しける。同じく死する道なれども、合戰の場に出でて、主君と共に討死にし、腹を切るは常の習なれども、かゝるためしは未だなしとて、譽めぬ人こそなかりけれ。此の首ども渡すに及ばず。餘りに父を戀ひしがりければとて、圓覺寺へ送りて、入道の墓の傍にぞ埋めける。

（卷二）

平治物語

待賢門の戰

左衞門佐重盛は生年二十三、今日の軍の大將なれば、赤地の錦の直垂に、櫨の匂の鎧に、蝶の裾金物打つたるに、龍頭の冑の緒を締めて、小烏と云ふ太刀を帶き、切斑の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黃桃花毛なる馬に、柳櫻摺りたる貝鞍置かせて乘り給へり。重盛宣ひけるは、「年號は平治なり、華洛は平安城なり、我等は平氏なれば、三事相應せり。敵を平げんこと何の疑かあるべき、誰かこゝに樊噲・張良が勇をなさざらん」とて、三千餘騎を三手に分けて、近衞・中御門・大炊御門より大宮表へ打出でて、陽明・待賢・郁芳門へ押寄せたり。

樊噲　漢の高祖の臣、

大內には三方の門をばさし固め、東面の陽明・待賢・郁芳門をば開かれたり。承明・建禮の脇の小門をもともに開きて、大庭には馬ども多く引立てたり。梅壺・桐壺・竹壺・簾壺・紫宸殿の前後、とうくわ殿の脇の壺まで、兵ひしと並みゐたり。これ皆源氏の勢なれば、白旗二十餘流打立てたり。大宮表には、平家の赤旗三十餘流差擧げて、勇み進める三千餘騎、一度に鬨をどつと作りければ、大內も響き渡りて夥し。鬨の聲に驚きて、只今までゆゝしく見えられつる信賴卿顏色變りて草の葉の如くにて、南階をおりられけるが、膝振ひておりかねたり。人なみ〳〵に馬に乘らんと引寄せさせたれども、太りせめたる大の男の、大鎧は着たり、馬は大きなり、乘煩ふ上、主の心にも似ずはやり切つたる逸物なれば、つと出でんつと出でんとしけるを、舍人七八人寄りて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒も、斯くやと覺ゆるばかりにて、乘りかね

穆王云々　周の穆王が八匹の駿馬で天下を巡つたといふことは史記に記してある。

給ふ所を、侍二人つと寄りて、「疾く召し候へ。」とて押しあげたり。あまりにや押したりけん、弓手の方へ乘り越して、伏しざまにどうと落つ。急ぎ引きおこして見れば、顏にいさごひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝この體を見て、日ごろは大將とて恐れ給ひけるが、はたと睨みて、「あの信頼と云ふ不覺人は臆したりな。」とて日華門を打出でて、郁芳門へ向はれければ、信頼も鼻血押拭ひ、とかくして馬に搔乘せられ、待賢門へ向はれけるが、物の用に合ふべしとも見えざりけり。

左衞門佐重盛、五百餘騎をば大宮表に殘し置き、五百餘騎にて押寄せて呼ばはり給ひけるは、「この門の大將軍は、信頼卿と見るは僻目か。斯く申すは桓武天皇の苗裔、太宰大貳清盛が嫡子、左衞門佐重盛生年二十三。」と名乘り懸けければ、信頼返事にもおよばず、「それ防げ侍ども。」とて引退く。大將の引き給ふ間防ぐ侍一人もなし。我先にと逃げければ、重盛いよ〳〵勇みて、大庭の椋の木の許まで攻付けたり。義朝是を見て、「惡源太はなきか。信頼と云ふ大臆病人が、待賢門をはや破られつるぞや。あの敵追出せ。」と宣ひければ、「承り候。」とて驅けられけり。つづく兵には、鎌田兵衞・後藤兵衞・佐々木源三・波多野次郎・三浦荒次郎・須藤刑部・長井齋藤別當・岡部六彌太・猪俣小平六・熊谷次郎・平山武者所・金子十郎・足立右馬允・上總介八郎・關次郎・片桐小八郎大夫、以上十七騎、轡を雙べて馳向ふ。大音聲揚げて「此の手の大將は誰人ぞ。名乘れ聞かん。」斯く申すは清和天皇九代の後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉の惡源太義平と申す者なり生年十五歳、武藏の大倉の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしよりこのかた、度々の合戰に一度も不覺の名を取らず、年積つ

惡源太　源義朝の長子義平。
鎌田兵衞　政家。
後藤兵衞　實基。
佐々木源三　秀義。
波多野次郎　義通。
三浦荒次郎　義澄。
須藤刑部　俊通。
長井齋藤別當　實盛。
岡部六彌太　忠澄。
猪俣小平六　範綱。
熊谷次郎　直實。
平山武者所　季重。
金子十郎　家忠。
大倉　比企郡。
義賢　義朝の弟。

て十九歳、見參せん」とて五百騎の眞中へ割つて入り、西より東へ追ひまくり、北より南へ追廻し、縱ざま横ざま十文字に、敵を颯と蹴散らして、「葉武者どもに目な掛けそ。大將軍を組んで討て。櫨の匂の鎧に、蝶の裾金物打つて、黄桃花毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押雙べて組んで落ち、手捕にせよ」と下知すれば、大將を組きせじと防ぐ平家の侍ども、與三左衞門・新藤左衞門を初として百騎ばかりが中にぞ隔たりける。惡源太を初として十七騎の兵共、大將軍に目を懸けて、大庭の椋の木を中に立て、左近の櫻、右近の橘を七八度まで追廻して、組まん組まんとぞ揉うだりける。十七騎に驅立てられて、五百餘騎叶はじとや思ひけん。大宮表へ颯と引く。大將左衞門佐は、弓杖突いて馬の息を繼がせ給ふところに、筑後守つと參りて、「曩祖平將軍の二度生れ替り給へる君かな」と向ふ樣に譽め

筑後守平家貞。

奉れば、今一度驅けて家貞に見せんとや思はれけん、前の五百餘騎をば留め置き、新手五百騎を相具して、又大庭の椋の木まで攻寄せたり。又惡源太驅向ひ、見廻していひけるは、「只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こそ洩すとも、今度に於ては餘すまじ。押雙べて組んで捕れ。兵ども」と下知すれば、勇みに勇みたる十七騎、我先にと進みければ、今度は難波次郎・同じき三郎・瀨尾太郎・伊藤武者を始とし、百餘騎が中に隔てたるに事ともせず、惡源太弓をば小脇にかいはさみ、鐙踏んばりつゝ立ちあがり、左右の手を擧げ、「幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡嫡なり。敵には誰か嫌はん。寄れや組まん」と云ふまゝに、先の如く大庭の椋の木の下を追廻して、五六度までこそ揉うだりけれ。重盛、組みぬべうもなくや思はれけん、又大宮表へひいて出づ。惡

須藤瀧口俊綱。

源太、二度まで敵を追ひまくり、弓杖突いて馬に息を繼がせけるに義朝是を見て、須藤瀧口を以て、「汝が不覺に防げばこそ、敵度々驅入るらめ。あれ速に追出せ」といひ遣はされければ、俊綱馳せて、この由をいふに、「承り候。進めや者ども」とて、色も替らぬ十七騎、大宮表に馳出でて、敵五百餘騎が中へ面も振らず割つて入る。引立てたる勢なれば、馬の足を立てかねて、大宮を下りに二條を東へ引きければ、「我が子ながらも義平は、能く驅けたるものかな、あ驅けたり」とぞ譽められける。

大將重盛・與三左衞門景安・新藤左衞門家泰、主從三騎懸放れ、二條を東へ引かれければ、惡源太鎌田にきと見合せて、「こゝに落つるは大將とこそ見れ。返せや」とて追ひかけたり。既に堀河にて追詰めけるが、弓手の方に材木多く充ち滿ちたるに、惡源太の乘り給へる馬かたなつけの駒にて、材木にや驚きけん、馬手の方へけし飛んで小膝を折りてどうと伏す。鎌田兵衞、延ばさじと、十三束取つて番ひ、能つ引いてひようと射る。重盛の射向の袖にはたと中つて飛返る。軈て二の矢を射たりければ押付にちようと中つて、のかつぎ碎けて跳り返れり。惡源太「是は聞ゆる唐皮と云ふ鎧ござんなれ、馬を射て落ちん所を討て」と下知せられければ、又能つ引いて、追樣に筈の隱るゝ程射込みたり。馬は屏風を返す如く倒るれば、材木の上に跳落され、冑も落ちて大童になり給ふ。鎌田堀河を馳越えて、重盛に組まんと落合うたり。重盛近付けては叶はじとや思はれけん、弓の弭にて鎌田が冑の鉢をちようと突く。突かれてゆらゆる間に冑を取つて打着つゝ緒を强くこそしめられけれ。

紀信　漢の高祖が滎陽で項羽に圍まれた時、高祖に代つて討たれた。

與三左衞門馳寄つて、中に隔たり申しけるは、「漢の紀信は高祖の命

榮陽（河南省。）主辱しめらるゝ時は云々

范蠡曰、爲二人臣一者、君憂臣勞、君辱臣死。（國語）

進藤左衞門家泰。

に代りて榮陽の圍を出し、終に天下を保たせき。主辱しめらるゝ時は臣死すといふに非ずや。景安爰に在り、寄れや組まん」といふ儘に、鎌田兵衞と引組んで、取つて押へける處に、惡源太馬引起し、是も堀河を馳越えて重盛に組まんと飛んでかゝりけるが、鎌田をや助くる、大將をや討たんと思案しけれども、大將には又も寄合ふべし、政家を討たせては叶はじと思ひ、與三左衞門に落合うて三刀刺して首を取る。重盛は憑み切つたる景安討たせて命生きて何かせんとて、既に惡源太と組まんとせられけるを、進藤左衞門馳來り、「家泰が候はざらん所にてこそ大將の御命をば捨て給ふべけれ」とて、我が馬を引向け中に隔てて、惡源太とむずと組む。政家は重盛に組まんとしけるが、主を討たせては叶はじと思ひければ、進藤左衞門に落重つて首を搔く。この間に重盛は、虎口を遁れて六波羅までぞ落ちられける。助かり難き命なり。（卷二）

平家物語評論

藤岡作太郎

意氣銷沈せる平安京の公卿は、ひたすら古代の摸倣に一時を糊塗して、また千載不朽の作をなすを思はず。關東の武士は鞍上に意氣を示して勢猛なりと雖も、朴訥粗野にして、眼に一丁字なし。この時に當りて新風潮を帶ぶるも文盲武士の比に非ず、學藝に通ずるも優柔公卿の流に非ずして、活潑潑地、よく文界一時の牛耳を執りて、清新の氣を鼓舞せるを僧侶、及び僧侶ならぬまでも、深く佛教の奥旨に徹底せる佛教尊信者の一階級となす。平易なる親鸞の假名聖教、激越なる日蓮が遺文等はその例にして、品格と生氣と二つながら備り、この時代の産物としては特筆すべく、宗教上の述作としては、或は不朽に傳ふべきものなるべし。されどこれを以て直ちにわが文學史上に優秀の地位を有するものとなさむは當らず。

さてさらば、この外に僧侶または佛敎尊信者の手に成りて、更に文學的價値の大なるものありとせむに、そは必ずしも親鸞・日蓮等の新佛敎に關係せる人ならざるべからざるの理なし。蓋し佛敎の新潮流を代表せるものは、いふまでもなく禪・念佛・日蓮等の諸宗なりといへども、從來の天台・眞言等の諸宗もこれに刺激せられ、これに警告せられて、覺醒一番、從來の生氣を呈し來れるを以てなり。わが鎌倉時代に於ける唯一の傑作たる平家物語は實に此の時に出づ。その著者の新佛敎に關するものなると舊佛敎に關するものなるとを問ふなかれ、ただその熱心なる佛敎尊信者の所產なるをいへば足る。何ぞその在家者たると出家者たるとを問はむや。

平家物語はいふまでもなく、平安末期に於ける源平の爭亂を描きたるものにして、結局平家が西海に落ち行きて、底の藻屑と化せる一篇の悲劇なり。事實の詳略、文體の異同はあれども、同じ消息を傳へたるものに、別に源平盛衰記あり。叙述の精細に於ては盛衰記取るべしと雖も、文學としては平家物語は戰記中の第一位に在るべし。

平家物語を讀みて吾人の最も感興を深うする所以のものは、そが歷史上空前の事實たる源平爭鬪の一大悲劇を寫せる點に在り。從來文運盛んにして作家が想像に生み來れる名篇傑作少からずといへども、わが國未だ曾てかゝる雄大沈痛の悲劇に接せず。壽永の天地を舞臺として、自然が演ぜるこの活歷史は、貧弱なる人間想像の埒を超越して、言葉の儘に小說よりも遙に奇なるものありしなり。もとより平家物語は純粹正確なる歷史には非ざるべし。その間著者が想像も交れり、傳說の誤れるものもまた多かるべし。然れども、その歷史的事實を土臺として取捨鹽梅せるものなるに至りては斷として疑ふべくもあらず。況やその事實たるわが歷史にあらはれたる最大悲劇にして、その局面の變化に富める、また尋常一樣のものに非ざるをや。平家物語が今日なほ讀者をして歎稱の

聲を絶たざらしむるもの、洵に故ありといふべし。

源平爭亂の事實は、何が故に、詩的にして多趣味なるか。いはく、平家一門二十餘年の盛衰が急轉掌を覆すがごときものなりしを以てなり。ただ榮枯地を變ふる夢の如くなりしのみを以ていはば、南北朝と多く異なることなし。されどこれは從來固定したりし社會の階級の動搖して、全く調和を缺ける新舊の二潮流は、こゝに始めて久しく蓄へ來れる威力と新進氣鋭の生氣とを以て堤を決して衝突せるもの、混沌澎湃の狀ほぼ想見すべからずや。南北朝の戰亂はその初はまた武士と公卿との爭なりきといへども、しかも當時の公卿は既に武を練ること日久しく、實は武を以て武に當れるものなり。源平時代の爭鬪は即ち然らず、源平兩武家の戰といへども、まことはこれ文と武との爭なり、新と舊との戰なり。この大混戰の渦中に投じて新舊衝突の犧牲となれるものを平家の一門とす。特に清盛が一生こそこれを代表して餘りあるものなれ。

平清盛は藤原氏の習慣的勢力に反撥して起れるなり。因襲の久しき、上下の階級自ら定まりて、その壓迫に堪へざれば、これを破り、これを倒して、一面繁褥なる社會的形式を顚覆すると共に、一面箝制束縛の境より自己を救ひ、以て人生本然の要求に應じて、その行動を自由にせむと試みたるなり。その志や諒とすべし。その徹頭徹尾、自己の威力に信賴せる獅子奮迅の大勇猛心や以て天下を横行するに足る。日本六十餘州は果して彼淨海によりて新光明を見たり。入道が希望はた將に成らむとす。ただ歷史の勢力や更に偉大なり。清盛いかに縱横無碍に奮鬪すとも、その張れる網をば破るべからず、否そが壓制は早くも至りぬ。平家の軟化はやがてその結果に非ずや。

清盛は知らず、昨日まで馬上弓を掻い挾んで疾驅せし嚴めしき武夫は、今日は詩歌管絃の宴に袖を絞る優にやさしき公達と化しぬ。甲冑やいづこ、意氣やいづこ、一門が今踏みて歸れる戰場の樣も忘れたりげに、いしく

も行ひすませる笑止さよ。平安朝以來の宗教もまた舊思想を代表して平家を煩はすこと多かりき。園城寺といひ、興福寺といひ、何れも不倶戴天の仇敵として、常に干戈をさし向けぬ。平家が横紙を破りて、一時帝居を福原に遷ししも、その理由の一は、蓋し京都の地に在りては、これ等舊思想の壓迫絶えずして、恣に威力を振ふに由なかりしが爲なりしなり。されど、既に久しく養ひ來れる習慣の惰力はこゝにもかれらを安んずる能はざらしめて、また幾ばくもなく都がへりの陋態を演ずるの止むを得ざるに至らしめぬ。さしもに魔王の威を振はむとせし清盛の運命も、これまでにして、その沒後數年を出でずして一門の破滅となり、西海の浦波を、永へに悲哀の曲を奏せしむるに至りしもの、單に源氏の武力の優りし爲とのみいふべからず。木曾義仲が一擧にして都に入るを得たるも、從來平家に同心したりし山門の衆を語らひてその合力を得たりしが爲に外ならず。奈良の大佛殿を燒き、伊勢の神領を掠めたる平家が無道の振舞はいかに天下萬衆の敵愾心を喚起したりけむ、およそこれ等の壓迫と怨恨とは相重なりて、かくまで容易にめざましき源氏の功名を遂げしめぬ。要するに平家沒落の主因は二あり。都會に上ると共に早くもその武裝を捨てて、文弱なる公卿に同化せしはその一にして、これに反して一方に新進の勇氣に任せて舊來の思潮に對する破壞を試み、終にまた防遏すべからざる反抗心を惹起せしむるに至りしはその二なり。

宇治川の合戰脆くも敗れて、腹かき切らむと扇の芝に坐したる源三位頼政が、最後の辭に「埋木の花咲くこともなかりしに身のなるはてぞ悲しかりける。」と詠める、薩摩守忠度が都落に馬の首を廻らして、俊成が五條の館を叩き、この中一首にても撰集に入るべきものあらば、生涯の面目なりとて、己の家集を預けて去れる、また一谷の櫓の上に吹きすさびたる笛の音に、木戸口に眞先かけたる朴訥の熊谷直實をして、平氏の君達は姿も心もやさしき上臈よなと、感歎の聲を放たしめし風流などの、詩味油然として

興趣湧くが如き感あるも、當時新舊思想を代表せる文武の對照が餘りに著しきに由るなるべし。平家物語の著者は固よりまたこの對照の讀者の感興を惹くに足るべきを信じ、肉動き骨鳴る勇ましき戰物語の間々に、この優美可憐なる話柄を插み、以てその庶幾する所を達せしめたるは、苟くもこの篇を繙くものの容易に看取する所なるべし。

平家物語は縱に雄大悲壯なる戰記を貫き、横に哀憐優雅なる物語を錯綜すると共に、また實に幽玄奥妙の佛敎趣味を點綴す。叡山に關する記事は殊に多し。これ既に著者が平家物語一篇を述作せる目的の寓する所、これを措きて他にあらむや。畢竟この主張ありて、治承の春を名殘に、壽永の秋を西國さして落ち行きし夢よりもはかなき平家一門の榮枯盛衰の史に言々涙あり、句々同情あり、讀むものをして讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて佛道に歸入せしめずんば止まざらむとす。その全篇を通じたる平氏が運命の波瀾の人心最奥の琴線に觸るゝものあるは言ふまでもなし、その間に插入せる愛情譚の如きも歸著する所は即ち無常にして、著者の理想は到る所に現る。その冒頭を「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れるもの久しからず、ただ春の夜の夢の如し。猛きものも終には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。」といふに起して、結末の灌頂の卷に、建禮門院が後白河法皇への物語にその身の經過し給ひし一生を六道に譬へたまへりといへるに考へて、その全豹を推すべし。（國文學史講話）

祇園精舍云々　涅槃經の句

平家物語

一　祇園精舍

祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。驕れる者久しからず、只春の夜の夢の如し。猛き者も終には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへ

ば、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆舊主・先皇の政にも從はず、樂しみを極め諫をも思ひ入れず、天下の亂れんことを覺らずして、民間の憂ふる所を知らざりしかば、久しからずして亡びにし者どもなり。　近く本朝を窺ふに、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、是等は奢れる心も、猛き事も、皆とりどりにこそありしかども、間近くは六波羅の入道、前の太政大臣、平朝臣清盛公と申しし人の有樣、傳へ承るこそ心も言葉も及ばれね。　其の先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原の親王九代の後胤、讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡子なり。　彼の親王の御子高視の王、無位無官にして失せ給ひぬ。　其の御子高望の王の時、始めて平の姓を賜ひて、上總介になり給ひしより、忽ちに王氏を出でて人臣に連なる。　其の子鎭守府の將軍良茂、後には國香と改む。

國香より正盛に至るまで六代は諸國の受領たりしかども、殿上の仙籍をば未だ許されず。（卷一）

二　殿上の闇討

然るに忠盛未だ備前守たりし時、鳥羽院の御願、得長壽院を造進して、三十三間の御堂を建て、一千一體の御佛をすゑ奉らる。　供養は天承元年三月十三日なり。　勸賞には闕國を賜ふべき由仰せ下されける。　折節但馬の國のあきたりけるをぞ下されける。　上皇、猶御感の餘りに、內の昇殿を許さる。　忠盛三十六にて始めて昇殿す。雲の上人、これを猜み憤り、同じき年の十一月廿三日、五節豐明の節會の夜、忠盛を闇討にせんとぞ議せられける。　忠盛この由を傳へ聞きて、「われ右筆の身にあらず、武勇の家に生れて、今不慮の恥に遇

貫首　藏人の頭
鈴の綱　清涼殿より校書殿に引けるる鈴を附けたる綱、藏人等を召さゝ爲の料

はんこと、家のため身のため心憂かるべし。詮ずる所、身を全うして、君に仕へ奉れといふ本文あり」とて、豫ねて用意を致す。參内の始より大きなる鞘卷を用意し、束帶の下にしどけなげにさしほらし、火のほの暗き方に向ひて、やはら此の刀を拔き出で、鬢に引き當てられたりけるが、よそよりは氷などのやうにぞ見えける。諸人目をすましけり。

又忠盛の郎等、もとは一門たりし平木工助貞光が孫、新三郎大夫家房が子に、左兵衞尉家貞といふ者あり。薄青の狩衣の下に、蒲葱縅の腹卷を著、欄袋つけたる太刀脇挾んで、殿上の小庭に畏つてぞ候ひける。貫首以下、異しみをなして「うつぼ柱より內、鈴の綱の邊に、布衣の者の候は何者ぞ。狼藉なり、疾う〳〵罷り出でよ」と六位を以て言はせられたりければ、家貞畏つて申しけるは、「相傳の主備前守殿の、今夜闇討にせられ給ふべき由承つて、そのならんやうを見んとてかくて候なり。えこそ出でまじ」とて又畏つてぞ候ひける。これらをよしなしとや思はれけん、その夜の闇討なかりけり。

忠盛、又御前の召に舞はれけるに、人々拍子をかへて、「伊勢瓶子は酢瓶なりけり」とぞはやされける。かけまくも忝くこの人々は柏原の天皇の御裔とは申しながら、中ごろは都の住居もうと〳〵しく、地下にのみ振舞なつて、伊勢の國に住國深かりしかば、その國の器物に事よせて、伊勢平氏とぞはやされける。その上忠盛の目のすがまれたりける故にこそ、かやうにはやされけるなれ。忠盛如何にすべきやうもなくして、御遊も未だ終らざるさきに御前を罷出でらるゝとて、紫宸殿の御後にして、人々の見られける所にて、横たへさゝれける腰の刀をば、主殿司に預け置きてぞ出でられける。

家貞、待ち受け奉りて、「さていかが候ひつるやらん。」と申しければ、かうともいはまほしうは思はれけれども、正しう言ひつる程ならば、やがて殿上までも切り上らんずるものの面魂にてありし間、「別の事なし。」とぞ答へられける。

五節には「白薄様、修禪寺の紙、卷上の筆、巴書いたる筆の管」なんどいふ、様々かやうに面白き事をのみこそ歌ひ舞はるゝに、中ごろ太宰權帥季仲卿といふ人ありけり。餘りに色の黑かりければ時の人、黑帥とぞ申しける。この人未だ藏人頭なりし時、御前の召に舞はれけるに、人々拍子をかへて、「あなくろ〳〵黑き頭かな、如何なる人の漆塗りけん。」とぞはやされける。又花山院の前太政大臣忠雅公、未だ十歳なりし時、父中納言忠宗卿に後れ給ひて、孤子にておはしけるを、故中御門藤中納言家成卿、その時未だ播磨守にておはしけ

殿上の御簡云々

昇殿を許されたるものは殿上の日給簡にその名を記す、それより名を除く意

るが、聟にとりて花やかにもてなされしかば、これも五節には、「播磨米は木賊草か、椋の葉か、人の綺羅を研くは。」とぞはやされける。「上古には、かやうの事ども多かりしかども、事いでこず、末代いかがあらんずらん、覺束なし。」とぞ人々申しあはれける。案の如く五節はてにしかば、院中の公卿・殿上人、一同に訴へ申されけるは、「それ雄劒を帶して公宴に列し、兵仗を賜ひて宮中を出入するは、皆これ格式の例を守る綸命のよしある先規なり。然るを忠盛朝臣或は年來の郎從と號して、布衣の兵を殿上の小庭に召し置き、或は腰の刀を横たへさして、節會の座に連なる。兩條希代、未だ聞かざる狼藉なり。事既に重疊せり。罪科尤ものがれ難し。早く殿上の御簡を削つて、闕官停任行はるべきか。」と諸卿一同に訴へ申されければ、上皇大いに驚かせ給ひて、忠盛を御前へ召して御尋あり。陳じ申さ

れけるは、「先づ郎從小庭に伺候のよし、全く覺悟仕らず。但し追日人々相巧まるゝ旨、仔細あるかの間、年來の家人、事を傳聞くによつて、その恥を助けんがために、忠盛には知らせずして竊に參候の條、力及ばざる次第なり。若し咎あるべくば、かの身を召しまゐらすべきか。次に刀のことは主殿司に預け置き候ひをはんぬ。これを召出され、刀の實否によつて、咎の左右行はるべきか。」と申されたりければ、「この儀尤も然るべし。」とて、急ぎかの刀を召出でて叡覽あるに、上は鞘卷の黑う塗りたりけるが、中は木刀に銀箔をぞ押したりける。當座の恥辱を遁れんがために、刀を帶するよしあらはすといへども、後日の訴訟を存じて、木刀を帶しける用意の程こそ神妙なれ。弓箭にたづさはらん程の者の謀には、尤もかうこそあらまほしけれ。かねてはまた郎從小庭に伺候のこと、かつうは武士

一院 後白河院

の郎等の習なり。忠盛が咎にあらずとて、却つて叡感に預りし上は敢へて罪過の沙汰はなかりけり。（卷一）

三　殿下乘合

さる程に、嘉應元年七月十六日、一院御出家あり。御出家の後も、萬機の政をしろしめされければ、院內わくかたなし。院中に近く召使はれける公卿殿上人、上下の北面に至るまで、官位俸祿、皆身に餘るばかりなり。されども人の心の習にて、猶飽足らで、「あつぱれその人の失せたらばその國はあきなん、その人の亡びたらばその官にはなりなん。」など、疎からぬどちは、寄り合ひ寄り合ひさゝやきけり。一院も內々仰せなりけるは、「昔より代々の朝敵を平げたるもの多しと雖も、未だかやうの事はなし。貞盛・秀郷が將門を討ち、賴

松殿
藤原基房

義が貞任・宗任を滅し、義家が武衡・家衡を攻めたりしにも、勸賞行はれしこと、わづか受領には過ぎざりき。今清盛が、かく心のまゝに振舞ふことこそ然るべからね。これも世末になつて王法の盡きぬる故なり」とは仰せなりけれども、ついでなければ御誡もなし。平家も亦、別して朝家を怨み奉らるゝこともなかりしに、世の亂れ初めける根本は、去んじ嘉應二年十月十六日に、小松殿の次男新三位中將資盛、その時は未だ越前守とて、生年十三になられけるが、雪ははだれに降りたりけり、枯野の景色まことに面白かりければ、若き侍ども三十騎ばかり召具して、蓮臺野や、紫野・右近馬場に打ち出でて、鷹ども數多すゑさせ、鶉・雲雀を追立て追立て、ひねもすに狩り暮らし、薄暮に及びて六波羅へこそ歸られけれ。

その時の御攝籙は、松殿にてぞまし〳〵ける。東洞院の御所より

太政入道
清盛

御參內ありけり。郁芳門より入御あるべきにて、東洞院を南へ、大炊御門を西へ御出なるに、資盛朝臣、大炊御門猪熊にて、殿下の御出に鼻突に參りあふ。御供の人ども、「何者ぞ、狼藉なり。御出なるに、乘物より下り候へ、下り候へ」と、いらてけれども、餘りに誇り勇み、世を世ともせざりける上、召具したる侍どもも、皆二十より內の若者どもなれば、禮儀骨法辨へたる者一人もなし。殿下の御出ともいはず、一切下馬の禮儀にも及ばず、只驅け破つて通らんとする間、暗さは暗し、つや〳〵太政入道の孫とも知らず。又少々は知りたれども、そら知らずして、資盛朝臣を始めとして、侍ども皆馬より取つて引き下し、頗る恥辱に及びけり。

資盛朝臣、はふ〳〵六波羅へ歸りおはして、祖父の相國禪門に、この由訴へ申されければ、入道、大いに怒つて、假令殿下なりとも、淨海が

あたりをば憚り給ふべきに、左右なくあの幼き者に恥辱を與へられけるこそ遺恨の次第なれ。かゝる事よりして、人には欺かるゝぞ。この事殿下に思ひ知らせ奉らでは、えこそあるまじけれ。如何にもして怨み奉らばや」と宣へば、重盛卿申されけるは、「これは少しも苦しく候まじ。賴政・光基など申す源氏どもに嘲られても候はんは、誠に一門の恥辱にても候べし。重盛が子どもとて候はんずるものが、殿の御出に參り合ひて、乘物より下り候はぬことこそ、返す〳〵も尾籠に候へ」とて、その時事に遭ひたる侍ども皆召寄せて、「自今以後汝等よく〳〵心得べし。誤つて殿下へ無禮の由を申さばやと思へ」とてこそ返されけれ。

その後、入道、小松殿にはかくとも宣ひも合せずして、片田舍の侍の極めてこはらかなるが、入道の仰せより外、世に又恐ろしき事なしと思ふ者ども、難波・妹尾を始めとして、都合六十餘人召寄せて、「來る二十一日、主上御元服の御定めの爲に、殿下御出あるべかんなり。いづくにても待ち受け奉り、前驅・御隨身どもが髻切つて、資盛が恥雪げ」とこそ宣ひけれ。兵ども畏り承つてまかり出づ。殿下これをば夢にもしろしめされず。主上、明年御元服、御加冠拜官の御定のために、暫く御直廬にあるべきにて、常の御出よりは引き繕はせ給ひて、今度は待賢門より入御あるべきにて、中御門を西へ御出なるに、猪熊・堀川の邊にて、六波羅の兵ども、ひた冑三百餘騎待ち受け奉り、殿下を中に取りこめ參らせて、前後より一度に鬨をどつとぞつくりける。前驅・御隨身どもが今日を晴と裝束したるを、あそこに追つかけ、こゝに追つつめさんざんに凌礫し、一一に皆髻を切る。隨身十人の中、右の府生武基が髻をも切られてげり。その中に藤

藏人大夫高範が髻を切るとて、「これは汝が髻と思ふべからず、主の髻と思ふべし。」と、言ひ含めてぞ切つてける。その後は、御車の内へも、弓の弭つき入れなどして、簾かなぐり落し、御牛の鞅切り放ち、かくさんざんにし散らして、悅の闕をつくり、六波羅へ歸り參つたれば、入道「神妙なり。」とぞ宣ひける。されども、御車添には、因幡のさいづかひ、鳥羽の國久丸といふ男下臈なれどもさか〳〵しき者にて、御車をしつらひ參らせ奉つて、中御門の御所へ還御なし奉る。束帶の御袖にて、御涙をおさへさせ給ひつゝ、還御の儀式のあさましさ、申すもなか〳〵おろかなり。大織冠淡海公の御事は擧げて申すに及ばず。忠仁公・昭宣公より以來、攝政關白の、かゝる御目に遭はせ給ふ事、未だ承り及ばず。これこそ平家の惡行の始なれ。小松殿、この由を聞き給ひて、大いに恐れ騷がれけり。その時行き

太政の入道
平清盛
かやうに人々あまた
藤原成親・同成經・平康頼・俊寛僧都
靈夢を蒙つて云々
この事は平家物語卷三にある

向ひたる侍ども皆勘當せらる。「假令入道如何なる不思議を下知し給ふとも、など重盛に夢ばかり知らせざりけるぞ、凡そは資盛奇怪なり、旃檀は二葉より芳しとこそ見えたれ。既に十二三にならんずる者が、今は禮儀を存知してこそ振舞ふべきに、かやうの尾籠を現じて、入道の惡名を立つ、不幸のいたり、汝一人にありけり。」とて、暫く伊勢の國へ追ひ下さる。されば、この大將をば、君も臣も御感ありけるとぞ聞えし。（卷一）

四　大教訓

太政の入道は、かやうに人々あまたいましめ置きても、なほ心ゆかずや思はれけん。すでに赤地の錦の直垂に、黑絲縅の腹卷の、白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜の次に靈夢を蒙つ

平右馬助　忠盛の弟忠正、清盛の叔父
新院　崇德院
一の宮　重仁親王
故刑部卿　平忠盛
故院　鳥羽院
院　後白河法皇
内　二條天皇

て、嚴島大明神より、うつゝに賜はられたりける白銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられしを脇に挾み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。「貞能」と召す。筑後守貞能は、木蘭地の直垂に、緋縅の鎧着て、御前に畏つてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、この事はいかが思ふぞ。保元に平右馬助を始めとして、一門半過ぎて、新院の御方に參りにき。一の宮の御事は故刑部卿の養君にてまし〳〵しかば、旁見放ち參らせ難かりしかども、故院の御遺誡に任せて、御方にて先をかけたりき。これ一つの奉公。次に、平治元年十二月信頼・義朝が謀叛の時、院・内を取り奉りて、大内にたてこもり、天下くらやみとなりしにも、入道隨分身を捨てて凶徒を追落し、經宗・惟方を召しいましめしに至るまで、君の御爲に、既に命を失はんとする事、度々に及ぶ。されば、人

成親　藤原氏
西光　俗稱藤原師光、後白河法皇の寵臣
君　後白河院
鳥羽の北殿　鳥羽離宮中の一つの建物
盛國　平氏清盛の臣
小松殿　重盛の邸

何と申すとも、いかでか此の一門をば、七代までは思召し捨てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、西光と申す下賤の無道人が申す事に、君の附かせ給ひて、やゝもすれば、此の一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。此の後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となりて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇をば、鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、これへまれ、御幸をなし參らせんと思ふはいかに。其の儀ならば、定めて北面の者共が中より、矢を一つ射んずらん。『その用意せよ』と、侍共に觸るべし。大方は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍置かせよ。きせなが取出せ。とこそ宣ひけれ。

主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳せ參つて「世は、はやかう候」と申しけ

大臣 平重盛

禪門 清盛

西八條殿 清盛の邸

れば、大臣聞きもあへ給はず、「あゝはや、成親卿の首の刎ねられたんな。」と宣へば、「其の儀にては候はねども、入道殿の御着長を召され候上は、侍共も皆打立ちて、只今院の御所、法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く、世を鎭めん程法皇をば鳥羽の北殿へ移し參らするか。然らずば、是へまれ、御幸をなし參らせうとは候へども、内々は鎭西の方へ流し參らせんとこそ、議せられ候ひつれ。」と申しければ、大臣「何に依つて只今さる事のおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂はしきこともやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。

門前にて、車より下り、門の内へ差入りて見給ふに、入道腹卷を着給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各〻色々の直垂に思ひ〳〵の鎧着て、中門の廊に二行に着座せられたり。その外、諸國の受領、衞府諸司な

小松殿 重盛

内府 内大臣重盛を指す

五戒 不偸盜・不邪淫・不妄語・不飲酒・不殺生の五戒

五常 父義・母慈・兄友・弟恭・子孝・また父子親・君臣義・夫婦別・長幼序・朋友信

どは縁に居こぼれ、庭にもひしと並居たり。旗竿ども引きそばめ引きそばめ、馬の腹帶をかため、冑の緒を締め、只今皆打立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子・直衣に大文の指貫のそばとりて、さやめき入り給へば、事の外にぞ見えられける。

入道、伏目になつて、「あはれ、例の内府が、世を評するやうに振舞ふ者かな。大きに諫めばや。」と思はれけれども、さすが子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうしたまふ人なれば、あの姿に腹卷を着て向はん事、さすがおもはゆう恥づかしう思はれけん、障子を少し引立て、腹卷の上に、素絹の衣をあわて着に着たまひたりけるが、胸板の金物の少しはづれて見えけるを隱さうと、頻りに衣を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は、舍弟宗盛卿の座上に着き給ふ。入道宣ひ出さるゝ事もなく、大

天兒屋根命　藤原氏の祖

臣もまた申上げらるゝ旨もなし。やゝあつて、入道宣ひけるは、「あの成親卿が謀叛は、事の數にも候はず。一向、法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずば、これへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。入道、さていかにやいかに。」とあきれ給へば、やゝあつて、大臣涙を抑へて、「この仰承り候に、御運はは や末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず、惡事を思ひ立ち候なり。又御有樣を見參らせ候に、更に現とも覺えず候。さすが、我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこのかた、太政大臣の官に至る人の、甲冑を鎧ふこと、禮儀を背くに非ずや。就中、御出家の御身なり。それ、

しいしゆ　旨趣

普天の下云々

普天之下莫非王土。率土之濱莫非王臣。（詩經）

潁川の水云々

支那堯の時代に許由といふものがあつた。堯が彼に天下を讓らうとしたのを耳の汚れとして潁川でその耳を洗つたといふ。

首陽山に云々

周の武王が殷の亂を平げて天下は周を宗とするに至つた。伯夷叔齊

三世の諸佛、解脫幢相の法衣を脫捨てて、忽ちに甲冑を鎧ひ、弓箭を帶しましまさん事、內には破戒無慚の罪を招くのみならず。外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。旁恐ある申事にて候へども、心の底にしいしゆを殘すべきにも候はず。先づ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これなり。その中に尤も重きは朝恩なり。普天の下、王地にあらずと云ふ事なし。されば、彼の潁川の水に耳を洗ひ、首陽山に薇を折りし賢人も、勅命背き難き禮儀をば、存知すとこそ承はれ。いかに況や、先祖にもいまだ聞かざりし、太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才暗愚の身を以て、蓮府・槐門の位に至る。しかのみならず、半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。これらの莫大の御恩を思召し忘れさせ給ひて、亂りがはしく法皇を

周の粟を食ふを恥として首陽山に隱れ薇を食つてゐたが遂に此處に餓死した

蓮府・槐門　いづれも大臣のこと

人皆心あり云々　絶忿棄瞋不怒人遠人皆有心心各有執彼是則我我是則彼非我必非聖彼必非愚是共是凡夫耳誰能可非之理相共賢愚如環無端是非定相共賢愚以彼人雖瞋還恐我矣我獨雖得從染同舉（第十二條）

傾け參らせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。　それ日本は神國なり。　神は非禮を受け給ふべからず。　然れば、君の思召し立たせ給ふ所、道理半ばなきにあらず。　中にも、此の一門は、代々の朝敵を平げて、四海の激浪を鎭むることは、無雙の忠なれども、その賞に誇ることは、傍若無人とも申しつべし。　聖德太子十七箇條の御憲法に、『人皆心有り。　心各執あり。　彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。　是非の理、誰か能く定むべき。　相共に賢愚なり。　環の如くにして端なし。　是を以て、たとひ人瞋るといふとも、還つて、我がとがを恐れよ』とこそ見えて候へ。　然れども、當家の運命未だ盡きざるによつて、御謀叛既に顯れさせ給ひ候ひぬ。　其の上、仰せ合せらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思召し立たせ給ふとも、何の恐れか候べき。　所

千顆萬顆の玉云々　瑩日瑩風、高低千顆萬顆之玉。染枝染浪、表裏一入再入之紅。（和漢朗詠集）

當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には、愈奉公の忠勤を盡くし、民の爲には、益撫育の哀憐を致させ給はば、神明の加護に預つて、佛陀の冥慮に背くべからず。　神明・佛陀感應あらば、君も思召し直す事、などか候はざるべき。　君と臣とをくらぶるに、親疎私なし。　道理と僻事を並べんに、いかでか道理につかざるべき。　これは尤も君の御ことわりにて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護しまゐらせ候べし。　その故は、重盛、初め、叙爵より、いま、大臣の大將に至るまで、しかしながら、君の御恩ならずと云ふ事なし。　此の恩の重き事を思へば、千顆萬顆の玉にも越え、その恩の深き色を按ずるに、一入再入の紅にも、猶過ぎたらん。　然らば、院中へ參り籠り候べし。　その儀にて候はば重盛が身に代り、命に代らんと契りたる侍共、少々候らん。　此等を召具して、院の

御所、法住寺殿を守護し參らせ候はば、さすが以ての外の御大事にてこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の巓よりも猶高き父の恩、忽ちに忘れんとす。傷ましきかな、不孝の罪を遁れんとすれば、君の御爲には、既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へがたし。申受くる所詮は、只重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず、又、院中をも守護し參らすべからず。されば、彼の蕭何は、大功かたへに越えたるによつて、官、大相國に至り、劒を帶し履をはきながら殿上へ昇ることを許されしかども、叡慮に背く事ありしかば、高祖重ういましめて、深う罪せられにき。かやうの先蹤を思へば、富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、旁〻極めさせたまひぬれば御運の盡きんこと、難かるべきにもあ

迷廬　蘇迷盧の略、須彌山ともいふ。高さ八萬四千由旬といふ

らず。富貴の家には祿位重疊せり。再び實なる木は、その根必ずいたむと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて、亂れん世をも見候べき。只末代に生を享けて、かゝる憂き目にあひ候重盛が果報の程こそつたなう候へ。只今も侍一人に仰せつけられ、御壺の内へ引出されて、重盛が首を刎ねられんずることは、いと易い程の御事にてこそ候はんずらめ。これを各〻聞き給へ」とて、直衣の袖も絞るばかりにかきくどき、さめざめと泣きたまへば、其の座に並み居たまへる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。入道、賴み切つたる內府はかやうに宣ふ。世にも力なげにて、いやいや、それまでの事は思ひもよりさうず。惡黨共の申す事に、君の附かせ給ひて、如何なる僻事などもや出で來んずらんと思ふばかりでこそ候へ。大臣縱ひ如何なる僻事出で來候へばとて、君をば

何とかし参らせ給ふべき」とて、つい立ちて中門に出で、侍共に宣ひけるは、「只今これにて申しつる事どもをば、汝等はよく承らずや。今朝よりこれに候ひて、かやうの事共を申し鎭めんとは存じつれども、餘りにひた騷ぎに見えつる間、まづ歸りつるなり。院參の御供においては、重盛が首の刎ねられたらんを見て仕れ。さらば、人參れ」とて、小松殿へぞ歸られける。（卷二）

二人 成經、康頼
一人 俊寛僧都
僧都 同上

五　有王島下り

さる程に、鬼界が島の流人ども、二人は召還されて都へ上りぬ。一人殘されて、憂かりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。僧都の幼うより、不便にして召使はれける童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人ども、けふ既に都へ入ると聞えしかば、

鳥羽 山城紀伊郡の郷

有王鳥羽まで行向つて見けれども、我が主は見え給はず。「いかに。」と問へば、「それは猶罪深しとて、一人島に殘されぬ」と聞いて、心うしなども愚なり。常は六波羅邊にたゝずみて聞きけれども、いつ赦免あるべしとも聞出さざりければ、僧都の御女の忍うでおはしける所へ參りて、「此の瀬にも洩れさせ給ひて、御上りも候はず。今はいかにもして、かの島へ渡つて、御行方をも尋ね參らせばやと存じ候。御文賜はつて參り候はん」と申しければ、姫御前斜ならず喜び、やがて書きてぞたうでける。暇を乞ふとも、よも許さじとて、父にも母にも知らせず。唐船の纜は、卯月・五月に解くなれば、夏衣たつを遲くや思ひけん、彌生の末に都を立ちて、多くの波路を凌ぎつゝ薩摩潟へぞ下りける。薩摩よりかの島へ渡る船津にて、有王を人あやしめ、着たる物を剝取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御

前の御文ばかりぞ、人に見せじと元結の中には隱しける。

さて、商人（アキンド）船（フネ）に乘つて、件の島へ渡つて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは事の數ならず。田もなし、畠もなし、里もなし、村もなし。おのづから、人はあれども、言ふことばをも聞知らず。有王、島の者に行向つて、「物申さう」と言へば、「何事」と答ふ。「これに都より流されさせ給ひたる、法勝寺の執行、俊寛僧都と申す人やまします」と問ふに、法勝寺とも執行とも、知りたらばこそ返事はせめ。ただ頭を振つて「知らぬ」と言ふ。その中に、ありける者が心得て、「いさとよ、さやうの人は、三人これにありしが、二人は召還されて都へ上りぬ。今一人殘されて、あそこ此處よと迷ひありきしが、その後は行方をも知らず」とぞ言ひける。山の方の覺束なさに、遙に分入り、峰に攀ぢ、谷に下れども、白雲跡を埋んで、往來（ユキキ）の道も定かならず、晴嵐夢を破つ

法勝寺 東山に在つた六勝寺の一

白雲云々 山遠雲埋行客跡。松寒風破旅人夢。（和漢朗詠集）

ては、その面影も見えざりけり。山にては終に尋ねも遇はず。海の邊について尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、沖の白洲にすだく濱千鳥の外は、跡とふ者もなかりけり。

或あした、磯の方より、かげろふなんどの如くに痩せ衰へたる者よろぼひ出で來たり。もとは法師にてありけりと覺えて、髮は空樣に生ひあがり、萬の藻屑取附けて、おどろを戴いたるが如し。繼目顯れて、皮ゆたひ、身に着たるものは、絹・布のわきも見えず。片手にはあらめを持ち、片手には、魚を貰うて持ち、歩むやうにはしけれども、はかも行かず、よろ〳〵としてぞ出で來たる。「都にて多くの乞丐人は見しかども、かゝる者は未だ見ず。諸阿修羅等、故在大海邊とて、修羅の三惡・四趣は、深山・大海の邊にありと、佛の說きおき給ひたれば、知らず、われ餓鬼道などへ迷ひ來たるか」とぞ覺えたる。は

沙頭云々 沙頭刻印鷗遊處、水底撈書雁時。（和漢朗詠集）

諸阿修羅等云々 この句報世經に在る

阿修羅 梵語、非天と譯す、鬼神の一

三惡 地獄・餓鬼・畜生の三惡道

四趣 三惡に修羅を加へたもの

や彼も此も次第に歩み近づく。若しかやうの者にても、我が主の御行方や知りたると、「物申さん」といへば「何事」と答ふ。「これに都より流され給ひたりし、法勝寺の執行、俊寛僧都と申す人やまします」と問ふに、童こそ見忘れたれども、僧都はいかで忘れ給ふべきなれば、「これこそそれよ」と宣ひもあへず、手に持てる物を投捨てて、すなごの上にぞ倒れ伏す。さてこそ我が主の御行方とは知りてけれ。僧都、やがて消入り給ふを、有王膝の上に掻載せ奉り、「多くの波路を凌ぎつゝ、遙々とこれまで尋ね参りたるかひもなく、いかにやがて憂きめを見せんとはせさせ給ふぞ」と、さめざめとかきくどきければ、僧都少し人心地いでき、助け起され、「誠に汝多くの波路を凌ぎつつ、遙々とこれまで参りたるこそ神妙なれ。ただ明けても暮れても、都の事をのみ思ひ居たれば、戀ひしき者共の面影は夢に見る折もあり、又幻に立つ時もあり。身もいたく疲弱つて後は、夢も現も思ひわかず。今汝が來れるをも、唯夢とのみこそ覺ゆれ。若し此の事の夢なりせば、覺めての後は如何せん」。有王「こは現にて候なり。さても、此の御有樣にて、今まで御命の延びさせ給ひたるこそ、不思議には覺え候へ」と申しければ、「いさとよ、これはこぞ少將や、判官入道が迎への時、その瀬に身をも投ぐべかりしを、由無き少將の『今一度、都の音づれをも待てかし』なんど、慰め置きしを、愚に若しやと賴みつゝ、長らへんとはせしかども、此の島には人の食ひものも絶えて無き所なれば、身に力のありし程は、山に登つて、硫黄といふ物を取り、九國より通ふ商人に遇ひ、食物に換へなどせしかども、日に添ひて、弱り行けば、今はさやうの業もせず。かやうに日の長閑なる時は、磯に出でて、網人・釣人に手を摺り、膝を屈めて、魚を貰ひ、汐干の

時は貝を拾ひ、荒海布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、憂きながら、今日までは長らへたれ。　さらでは、浮世を渡るよすがをば、いかにしつらんとか思ふらん」。

僧都、こゝにて何事をもいはばやとは思へども、「いざ、我が家へ」と宣へば、有王、「あの御有樣にても、家を持ち給へる不思議さよと思ひ、僧都を、肩に引懸け參らせ、敎に隨つて行く程に、松の一叢ある中に、より竹を柱とし、蘆を結ひ、桁・梁に渡し、上にも、下にも、松の葉をひしと取懸けたれば、雨風たまるべうも見えず。　都にては、法勝寺の寺務職にて、八十餘箇所の莊務を司り給ひしかば、棟門・平門の內に、四五人の所從・眷屬に圍繞せられておはせし人の、まのあたり、かゝる憂きめに逢はせ給ふ事の不思議さよ。　業にさまざまあり、順現・順生・順後業といへり。　僧都一期が間、身にもちふる所、皆大伽藍の寺物。

順現　惡業の現在に報ゆるを順現、生をかへて報ゆるを順生、

子孫に報ゆるを順後業といふ

西八條　清盛の邸

佛物ならずと云ふ事なし。　されば彼の信施無慚の罪に依つて、今生にてはや感ぜられたりとぞ見えたりける。

僧都、こは現にてありけりと思ひ定めて、「こぞ少將や判官入道迎への時も、此等が文といふ事もなし。　今又汝が來れるにも、おとづれのなきは、これらには、かくとも知らせざりつるか」と宣へば、有王涙に咽び、うつぶして、暫しは御返事にも及ばず。　やゝあつて起上り、涙を抑へて申しけるは、「君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參つて、資財・雜具追捕し、御內の者ども搦め取り、御謀叛の次第を尋ね問ひ、皆失ひ果て候ひき。　北の方は、幼き人を隱しかね參らせ給ひて、鞍馬の奥に忍うで御渡り候ひしにも、この童ばかりこそ、時々參りて御宮仕つかまつり候なれ。　何れも御歎のおろかなる方は候はねども、中にも、幼き人は、餘りに戀ひ參らせ給ひて、參り候度毎に、『い

かに有王よ、わが父御前の渡らせ給ふ鬼界が島とかやへ具して参れ』と宣ひて、むづからせ給ひしが、過ぎ候ひし二月（キサラギ）に、もがさと申す事に失せさせおはしまし候ひぬ。北の方は、その御歎と申し、又これの御事と申し、一方ならぬ御物思に思召し沈ませ給ひて、打臥させ給ひしが、去んぬる三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひて候ひぬ。今は姫御前ばかりこそ、奈良の姨御前の御許に忍うでおはしけれ。それより御文給はつて参つて候」とて取出でて奉る。

僧都之を開けて見給へば、有王が申すに違はず書かれたり。奥には、「などや、三人流されておはします人の、二人は召還されて候に、何とて一人殘されて、今まで御上りも候はぬぞ。あはれ高きも賤しきも、女の身程いひがひなきことは候はず。男の身にても候はば、渡らせ給ふ島へも、などか尋ね参らで候ふべき。此の童を御伴にて、急ぎ上らせ給へ」とぞ書かれたる。「これ見よ、有王よ。此の子が文の書きやうのはかなさよ。おのれを伴にて急ぎ上れと書きたることの恨めしさよ。俊寛が心に任せたる憂身ならば、いかでか此の島にて、三年の春秋をば送るべき。今年は十二になると覺ゆるが、これ程にはかなうては、いかでか人にも見え、宮仕をもして、身をも助くべき」とて、泣かれけるにぞ、「人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふ」とは、今こそ思ひ知られけれ。

人の親の云々

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（後撰集）

「此の島へ流されて後は、暦も無ければ、月日の立つをも知らず。ただ自ら花の散り、葉の落つるを見ては、三年の春秋を辨へ、蟬の聲、麥秋を送れば夏とおもひ、雪の積るを冬と知る。白月・黑月の變り行くを見ては、三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つになると覺ゆる幼き者も、はや先立ちけるござんなれ。西八條へ出でし

時、此の子が行かんと慕ひしを、やがて還らうずるぞと慰め置きしが、只今のやうに覺ゆるぞや。それを限とだにも思はましかば、今暫くもなどか見ざらん。親となり、子となり、夫婦の縁を結ぶも、皆此の世一つに限らぬ契ぞかし。今は姫が事ばかりこそ心苦しけれども、それは生身(イキミ)なれば、歎きながらも過さんずらん。さのみ長らへて、おのれに憂き目を見せんも、我が身ながらつれなかるべし。」とて、みづから食事を止め、ひとへに彌陀の名號を唱へ、臨終正念を祈られける。

有王わたつて、二十三日と申すに、僧都、庵の中にて、遂にをはり給ひぬ。年三十七とぞ聞えし。有王、空しき姿に取附き奉り、天に仰ぎ、地に伏し、心の行く程泣き飽きて、やがて「後世の御伴仕るべう候へども、此の世には姫御前ばかりこそ渡らせ給ひ候へ。後世弔ひ参らすべき人も候はず。しばし長らへて、御菩提を弔ひ参らすべし」。とて、ふしどを改め、庵をきりかけ、松の枯枝、蘆の枯葉ひしと取掛けて、藻鹽の煙となし奉り、荼毗事終へぬれば、白骨を拾ひ首に懸け、又商人船にて九國の地にぞ着きにける。

それより僧都の御女の忍うでおはしける御許に参りて、有りしやうを始よりこまごまと語り申す。「なか〳〵文を御覽じてこそ、いとど御思はまさらせ給ひて候ひしか。件の島には、硯も紙もなければ、御返事にも及ばず。思召されつる御事どもは、さながら空しくて止み候ひぬ。今は生々世々を送り、他生曠劫をば隔て給ふとも、いかでか御聲をも聞き、御姿をも見参らせ給ふべき。只いかにもして御菩提を弔ひ参らせ給へ。」と申しければ、姫御前聞きも敢へ給はず、伏しまろびてぞ泣かれける。やがて、十二の年、尼になり、奈

良の法華寺に行ひすまして、父母の後世を弔ひ給ふぞあはれなる。有王は俊寛僧都の遺骨を首にかけ、高野へ登り、奥の院に納めつゝ、蓮華谷にて法師になり、諸國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。かやうに、人々の思ひなげきの積りぬる、平家の末こそ恐ろしけれ。

（卷三）

法華寺　東大寺の西にある尼寺、全國の總國分尼寺

六　少將都還

正月下旬　治承三年

正月下旬に、丹波の少將成經・平判官康頼入道二人の人々は、肥前の國鹿瀬の庄を立ちて、都へとは急がれけれども、餘寒も未だ烈しく、海上もいたく荒れければ、浦傳ひ・島傳ひして、二月十日頃にぞ、備前の兒島に著き給ふ。それより父大納言殿の御わたりあるなる有木の別所とかやに尋ね入りて見給へば、竹の柱舊りたる障子などに、書き置き給ひつる筆のすさびを見給ひて、「あはれ人の形見には、手跡に過ぎたる物ぞなき。書き置き給はずば、いかでかこれを見るべき。」とて、康頼入道と二人、讀みては泣き、泣きては讀む。「安元三年七月廿日出家、同じき廿六日信俊下向」とも書かれたり。さてこそ源左衞門の尉信俊が參りたるをも知られけれ。傍なる壁には「三尊來迎、便あり。九品往生、疑なし」とも書かれたり。此の形見を見給ひてこそ、さすが欣求淨土の望もおはしけりと、限りなき歎の中にも、聊か頼もしげには宣ひけれ。

その墓を訪ねて見給へば、松の一叢ある中に、かひがひしく壇を築きたる事もなし。土の少し高き處に向ひ、少將袖かき合せ、生きたる人に物を申すやうに、泣く〳〵かき口説きて申されけるは、「遠き御守とならせおはしましたる事をば、島にても幽かに傳へ承つて

候ひしかども、心に任せぬ憂き身なれば、急ぎ參ることも候はず。成經彼の島へ流されて後の便なさ、一日片時の命も有り難くこそ候ひしかども、さすが露の命も消えやらで、此の二年を送つて、今召還さるゝ嬉しさも、さる事にては候へども、父大納言殿のまさしくこの世に渡らせ給はんを、見參らせても候はばこそ、さすが命の長きかひも候はめ。これまでは急がれつれども、今日より後は急ぐべしとも覺えず」とて、かき口説きてぞ泣かれける。誠に存生の時ならば、大納言入道殿こそ如何にとも宣ふべきに、生を隔てたる習ほど恨めしかりける事はなし。苔の下には誰か答ふべき。唯嵐に騷ぐ松の響ばかりなり。

其の夜は康頼入道と二人、墓のめぐりを行道し、明けければ新しく壇築き、釘貫せさせ、前に假家造り、七日七夜が間念佛申し、經書きて、

秋の山　山城の名所、「ふかき夜の鳥羽田の面の鹿の音をはるかにおくる秋の山風」新拾遺

結願には大なる卒都婆をたて、「過去聖靈、出離生死、證大菩提。」と書きて、年號月日の下には「孝子成經。」と書かれたれば、賤山がつの心なきも、子に過ぎたる寶なしとて、袖を濡さぬはなかりけり。

同じき三月十六日、少將鳥羽へ夕暮近く著き給ふ。故大納言殿の山莊すはま殿とて鳥羽にあり。それに立寄り見給へば、住み荒して年經にければ、築地はあれどもおほひなく、門はあれども扉もなし。庭に立入り見給へば、人跡絶えて苔深し。池の邊を見廻せば、秋の山の春風に白波頻りにをりかけて、紫鴛白鷗逍遙す。興ぜし人の戀ひしさに、唯盡きせぬものは涙なり。家はあれども、欄門破れて、蔀・遣戸も絶えてなし。「此處には大納言殿のとこそおはせしか、この妻戸をばかくこそ出で入り給ひしか、あの木をば自らこそ植ゑ給ひしか。」など言ひて、言の葉につけても、唯父の事をのみ戀ひ

しげにこそ宣ひけれ。三月中の六日なれば、花は未だ名殘あり。楊梅桃李の梢こそ、折知り顔に色々なれ。昔の主人はなけれども、春を忘れぬ花なれや。少將花の下に立寄りて、

桃李不言春幾暮。煙霞無跡昔誰栖。

故郷の花のものいふ世なりせば、

いかに昔のことをとはまし。

この古き詩歌を口ずさみ給へば、康頼入道も折節あはれに覺えて、墨染の袖をぞ濡しける。暮るゝ程とは待たれけれども、餘りに名殘惜しくて、夜更くるまでこそおはしけれ。更け行くまゝには、荒れたる宿の習として、古き軒の板間より洩る月影ぞ隈もなき。鷄籠の山明けなんとすれども、家路は更に急がれず。さてしもあるべき事ならねば、迎へに乘物ども遣はして待つらんも心なしとて、少

管三品の詩句丹竈道成仙室靜、山中景色月花低、石床留洞嵐空佛、玉案拋林鳥獨啼、李不言春幾暮、煙霞無跡昔誰栖、玉喬一十雲長斷、早晩笙聲歸故溪（和漢朗詠）後拾遺集に出づ

將泣く〳〵すはま殿を出でつゝ、都へ還り上られける。人々の心の中、さこそは嬉しくもまた哀れにもありけめ。

康頼入道が迎へにも、乘物はありけれども、今更名殘惜しきにとて、それには乘らず、少將の車の尻に乘りて、七條河原までは行き、それより行き別れけるが、猶行きもやらざりけり。花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が一村雨の過ぎ行くに、一樹の蔭に立寄りて、別るゝ名殘も惜しきぞかし。況やこれは憂かりし島の住居、船の中、波の上、一業所感の身なれば、先世の芳緣も淺からずや思はれけん。

少將は元の如く院へ參らせ給ひて、宰相の中將まで上り給ふ。康頼入道は東山雙林寺に我が山莊のありければ、それに落ちつきてまづかくぞ思ひ續けける。

ふるさとの軒の板間に苔むして、
　思ひしほどは洩らぬ月かな。

やがて其處に籠居して、うかりし昔を思ひやり、「寶物集」といふ物語を書きけるとぞ聞えし。（卷三）

七　渡邊競

五月十六日（治承四年）

五月十六日、「高倉の宮の、御謀叛起させ給ひて、三井寺へ落ちさせ給ふぞや。」と申す程こそありけれ、京中の騷動なのめならず。抑、此の源三位入道頼政は、年ごろ日ごろもあればこそありけめ、今年如何なる心にて、謀叛をば起されけるぞといふに、平家の次男宗盛卿の、不思議の事をのみしたまひけるに由つてなり。されば人の世にあればとて、すずろに言ふまじき事を言ひ、すまじき事をするは、よくよく思慮あるべき事なり。たとへば、そのころ、三位入道の嫡子、伊豆守仲綱の許に、九重に聞えたる名馬あり。鹿毛なる馬の雙なき逸物、乘走り心向け、世にあるべしとも覺えず。名をば木の下とぞ申しける。

宗盛卿使者を立てて、「聞え候名馬を給はつて、見候はばや。」と宣ひ遣されたりければ、伊豆守の返事には、「さる馬をば持つて候ひしを、此の程餘りに乘り疲らかして候程に、暫くいたはらせんがために、田舍へ遣して候。」と申されければ、「さらんには力及ばず。」とて、其の後は沙汰無かりけるが、多く並み居たりける平家の侍共、「あつぱれ、其の馬は一昨日も候ひし、昨日も見えて候、今朝も庭乘りし候ひつる。」など、口々に申しければ、さては惜しむござんなれ。憎し、請へ。」とて、侍して走せさせ、文などして、一時が中には、五六度、七八度など請はれ

ければ、三位入道是を聞き、伊豆守に向つて宣ひけるは、「假令金を以て丸めたる馬なりとも、それ程人の請はうずるに惜しむべきやうやある。其の馬速に六波羅へ遣せ。」とこそ宣ひけれ。伊豆守力及ばず、一首の歌を書き添へて、六波羅へ遣さる。

戀ひしくば來ても見よかし、身にそふる
かげをばいかが放ちやるべき。

宗盛卿先づ歌の返事をばし給はで、「あつぱれ馬や。馬は誠に良い馬でありけり。されども餘りに惜しみつるが憎きに、主が名乘を鐵燒(カナヤキ)にせよ。」とて、仲綱と云ふ鐵燒して、廐にこそ立てられけれ。まらうど來りて、「聞え候名馬を見候はばや。」と申しければ、「その仲綱めに鞍を置け、引出せ、乘れ、打て、張れ。」なんどぞ宣ひける。伊豆守此の由を傳へ聞き給ひて、身に代へて思ふ馬なれども、權威につきて取らるゝさへあるに、剩へ天下の笑はれぐさとならんずる事こそ安からね。」と、大きに憤られければ、三位入道宣ひけるは、「何でふ事のあるべきと思ひ侮つて、平家の人共が、斯樣のしれ事をするにこそあるなれ。その儀ならば、命生きても何にかはせん、便宜を窺ふにこそあらめ。」と宣へども、私には思ひも立たれず、高倉宮を勸め申されけるとぞ、後には聞えし。

さるほどに、同じき十六日の夜に入りて、源三位入道頼政・嫡子伊豆守仲綱・次男源大夫判官兼綱・六條藏人仲家その子藏人太郎仲光以下、混胄(ヒタカブト)三百餘騎、館に火かけ燒上げて、三井寺へこそ參られけれ。こゝに三位入道の年ごろの侍に、渡邊の源三競の瀧口といふ者あり。馳せおくれて留りたりけるを、六波羅へ召して、「など汝は相傳の主三位入道が供をばせで留つたるぞ。」と宣へば、競畏つて申しけ

るは、「日ごろは自然のことも候はば、眞先かけて命を奉らうとこそ存ぜしが、今度は如何候ひつるやらん、かうとも知らせられざりつる間、留つて候」と申す。　宗盛卿、「こゝにも又兼參の者ぞかし。　先途後榮を存じて、當家について奉公せうとや思ふ、又朝敵賴政法師に同心せんとや思ふ、有のまゝに申せ」とこそ宣ひけれ。　競涙をはらはらと流して、「たとひ相傳のよしみ候とも、如何か朝敵となれる人に同心をば仕り候べき。　ただ殿中に奉公致さうずる候」と申しければ、大將、「さらば奉公せよ。　賴政法師がしけん恩にはちつとも劣るまじきぞ」とて入り給ひぬ。

朝より夕に及ぶまで「競はあるか」。「さふらふ」。「在るか」。「さふらふ」。とて伺候す。　日もやう〳〵暮れければ、大將出でられたり。　競畏つて申しけるは、「誠や三位入道は、三井寺にと聞え候。　定めて夜討なんどもや向けられ候はんずらん。　三位入道の一類、渡邊黨、さては三井寺法師にてぞ候はんずらん。　心にくゝも候はず。　罷向つて擇討なども仕るべし。　さる馬を持つて候ひしを、この程親しい奴めに盗まれて候。　御馬一匹下しあづかり候はばや」と申しければ、大將「尤もさるべし」とて、白葦毛なる馬の煖廷（ナンレイ）とて秘藏せられたりけるに、よい鞍置いて競にたぶ。　賜はつて宿所に歸り、「早や日の暮れよかし。　三井寺へ馳せまゐり、入道殿の眞先かけて討死せん」とぞ申しける。　日もやう〳〵暮れければ、妻子どもをばかしここに立忍ばせて、三井寺へと出でたちける、心のうちこそ無慚なれ。

狂文（キヤウモン）の狩衣、菊とぢ大きらかにしたるに、重代の着背（キセナガ）、緋縅の鎧着て、星白の冑の緒をしめ、いかもの作の太刀を帶き、二十四指いたる大中黑の矢負ひ、瀧口の骨法忘れじとや、鷹の羽で作（ハ）いだりける的矢

一手ぞ差添へたる。滋籐の弓持つて煖廷に打乘り、乘替一騎打具し、舍人男に持楯脇挾ませ、屋形に火かけ燒上げて、三井寺へこそ馳せたりけれ。六波羅には、競が屋形より火出で來たりとてひしめきけり。宗盛卿急ぎ出でて、「競はあるか」。「候はず」と申す。「すは、きやつめを手延にして、たばかられぬるは。あれ追つかけて討て」と宣へども競は大力の剛の者、矢つぎ早の手きゝにてありければ、二十四さいたる矢では、まづ二十四人は射殺されなんず。音なせそ」とて進む者こそなかりけれ。

唯今しも三井寺には、渡邊黨寄合ひて、競が沙汰ありけり。「いかにもして、この競瀧口をば召具せられ候はんずるものを」と口々に申されければ、三位入道、競が心をよく知つて宣ひけるは、「無下にその者捕へからめられはせじ。入道に志深き者なれば、見よ、唯今參らうずるぞ」と宣ひもはてぬに、競つと參りたり。「されば、こそ」とぞ宣ひける。競畏つて申しけるは、「伊豆守殿の木下（コシタ）がかはりに、六波羅の煖廷をこそ取つて參つて候へ。參らせ候はん」とて奉る。伊豆守斜ならず悅び給ひて、やがて尾髮を切り、鐵燒をして、その夜六波羅へ遣さる。夜半ばかり門の內へ追ひ入れたりければ、廐に入りて馬どもと食ひあひければ、その時舍人驚き合ひ、「煖廷が參つて候」と申す。宗盛卿急ぎ出て見給ふに、「昔は煖廷、今は平宗盛入道」といふ鐵燒をこそしたりけれ。大將、「につくい競めを斬つて捨つべかりけるものを、手延にしてたばかられぬることこそ安からね。今度三井寺へ寄せたらんずる人々は、如何にもして競めを生捕にせよ。鋸で頸斬らん」と、躍り上り躍り上り怒られけれども、煖廷が尾髮も生ひず、鐵燒も亦失せざりけり。（卷四）

八　三位中將

さる程に本三位中將重衡卿をば、鎌倉前右兵衞佐頼朝頻に申されければ、さらば下さるべしとて、土肥次郎實平が手より、九郎御曹司の宿所へ渡し奉る。同じき三月十日の日、梶原平三景時に具せられて、關東へこそ下られけれ。西國にて如何にもなるべかりし人の、生きながら捕はれて、都へ上り給ふだに口惜しきに、今更また關の東へ赴かれけん心の中、推量られて哀れなり。四宮河原になりぬれば、こゝは昔、延喜第四の皇子蟬丸の、關の嵐に心をすまし琵琶を彈き給ひしに、博雅三位といひし人、風の吹く日も吹かぬ日も、雨の降る夜も降らぬ夜も、三年が間歩を運び、立ち聞いて、かの三曲を傳へけん、わら屋の床の古も、想ひやられてあはれなり。

唐衣云々
唐衣きつゝなれにしつましあれば、はるばるきぬる旅をしぞ思ふ（伊勢物語）

又越ゆべし
年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさ夜の中山（西行）

逢坂山をうち越えて、瀬田の唐橋駒もとどろと踏み鳴らし、雲雀上れる野路の里、志賀の浦浪春かけて霞にくもる鏡山、比良の高峯を北にして、伊吹の嶽も近づきぬ。心をとむとしなけれども、荒れてなか〳〵やさしきは、不破の關屋の板廂、いかに鳴海の汐干潟、涙に袖はしをれつゝ、かの在原の何某の唐衣きつゝ馴れにしと詠めけん參河の國の八橋にもなりぬれば、蜘蛛手にものをとあはれなり。濱名の橋を渡り給へば、松の梢に風さえて、入江に騒ぐ波の音、さらでも旅は物憂きに、心をつくす夕まぐれ、池田の宿にも著き給ひぬ。都を出でて日數經れば、小夜の中山にかゝり給ふ。又越ゆべしとも覺えねば、いとど哀れの數そひて、袂ぞいたく濡れまさる。宇津の山邊の蔦の道、心細くも打ち越えて、手越を過ぎて行けば、北に遠ざかつて、雪白き山あり。問へば甲斐の白峯といふ。その時三位

中將、落つる涙をおさへつゝ、

惜しからぬ命なれども今日までに
つれなきかひの白ねをも見つ。

清見が關打ち越えて、富士の裾野になりぬれば、北には、青山峩々として、松吹く風颯々たり。南には蒼海漫々として、岸打つ浪も茫々たり。足柄の山打ち越えて、こゆるぎの森・鞠子川・小磯・大磯の浦々・やつまと・とがみが原・御輿が崎をも、打ち過ぎて、急がぬ旅とは思へども、日數やう〳〵重なれば、鎌倉へこそ入り給へ。

兵衞佐殿、三位中將殿に對面あつて申されけるは、抑、賴朝、君の御憤を休め奉り、父の恥を清めんと思立ちし上は、平家を滅さん事案の內に存ぜしかども、正しうかやうに御目にかゝるべしとは、かけて存じ候はず。此の定では、屋島の大臣殿の見參にも入りぬべしと

覺え候。さても南都炎上の事は、故入道相國の御成敗にて候ひけるか、又時に取つての御計らひか、以ての外の罪業でこそ候めれと申されければ、三位中將宣ひけるは、先づ南都炎上の事は故入道相國の成敗にも非ず、又重衡が私の發起にても候はず。衆徒の惡行を靜めんが爲に罷向つて候ひし程に、不慮に伽藍の滅亡に及びぬる事は力及ばざる次第なり。事新しき申し事にて候へども、昔は源平左右に爭ひて、朝家の御固めたりしかども、近頃は源氏の運傾きたりし事、人皆存知の旨なり。就中、當家は保元・平治より以來、度々の朝敵を平げ、勸賞身に餘り、忝くも一天の君の御外戚たり。其に就き候うては、帝王の御敵討ちたる者は、七代迄朝恩盡きずと申す事は、極めたる僻事にてぞ候ひける。其の故は目前故入道相國は君の御爲に命を失はんとする事度々に及ぶ。されども、其の身

一代の幸にて、子孫かやうになるべきやは。運盡き世亂れて、都を出でし後は、骸を山野に曝し、うき名を西海の波に流さばやとこそ存ぜしに、生きながら囚れて、是迄下るべしとは努々存じ候はず。唯先世の宿業こそ口惜しう候へ。弓箭取る身の敵の手に渡つて命を失はん事、全く恥にて恥ならず。唯芳恩には、疾く〳〵首を刎ねらるべしとて、其の後は物をも宣はず。兵衞佐殿も誠に哀に思はれければ、抑平家を賴朝が私の敵とは努々思ひ奉らず、唯帝王の仰せこそ重う候へ。さりながらも南都を滅されたる伽藍の敵なれば、大衆定めて申す旨もやあらんずらんとて、伊豆國の住人狩野介宗茂にぞ預けられける。

九　壇の浦

二位殿（二位尼、清盛の室）

さる程に源氏の兵ども、平家の船に乘り移りければ、水主・楫取ども、或は射殺され、或は斬り殺されて、船をなほすに及ばず、船底に皆倒れ伏しにけり。新中納言知盛卿、小船に乘つて、急ぎ御所の御船へ參らせ給ひて、「世の中は今はかくと覺え候。見苦しき者どもをば皆海へ入れて、船の掃除召され候へ」とて、掃いたり、拭うたり、塵拾ひ、艫舳に走り廻つて、手づから掃除し給ひけり。

二位殿は、日頃より思ひ設け給へることなれば、鈍色の二つぎぬ打ちかづき、練袴のそば高くとり、神璽を脇に挾み、寶劍を腰にさし、主上を抱きまゐらせて、「われは女なりとも敵の手にはかゝるまじ、主上の御供に參るなり。御志思ひたまはん人々は、急ぎ續き給へや。」とて、しづ〳〵と舷へぞ歩み出でられける。主上今年は八歳にぞならせおはします。御年の程より遙にねびさせ給ひて、御かたち

いつくしう、あたりも照り輝くばかりなり。御髪黑う、ゆら〳〵と御背中過ぎさせ給ひけり。主上あきれたる御有樣にて、「そも〳〵尼前、われをばいづちへ具して行かんとはするぞ。」と仰せければ、二位殿、幼き君に向ひまゐらせ、涙をはら〳〵と流して、「君は未だ知ろし召され候はずや。先世の十善戒行の御力によつて、今萬乘の主とは生れさせ給へども、惡緣に引かれて御運既に盡きさせ給ひぬ。先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮に御暇申させおはしまし、その後西に向はせ給ひて、西方淨土の來迎にあづからんと、誓はせおはしまして、御念佛候べし。この國は粟散邊土と申して物憂き境にて候。あの波の下にこそ、極樂淨土とてめでたき都の候。それへ具しまゐらせ候ぞ。」と、さまざまに慰めまゐらせしかば、山鳩色の御衣に、びんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、小さく美しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮に御暇申させおはしまし、その後西に向はせ給ひて御念佛ありしかば、二位殿、やがて抱きまゐらせて、「波の底にも都のさぶらふぞ。」と、慰めまゐらせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。

悲しきかな、無常の春の風忽ちに華の御姿を散らし、いたましきかな、分段の荒き涙玉體を沈め奉る。殿をば長生と名づけて、長きすみかと定め、門をば不老と號して、老いせぬ關とは書きたれども、未だ十歲のうちにして底の水屑とならせおはします。十善帝位の御果報申すもなか〳〵おろかなり。雲上の龍下つて、海底の魚となり給ふ。大梵高臺の閣の上、釋提喜見の宮の內、古は槐門棘路の間に九族をなびかし、今は船の中、波の下にて御身を一時に亡し給ふこそ悲しけれ。

判官源義經

女院はこの有様を見參らせたまひて、今はかうとや思召されけん、御硯・御燒石、左右の御懐に入れて、海に入らせ給ふを、渡邊源五右馬允昵、小舟をつと漕ぎ寄せて、御髪を熊手にかけて引き上げ奉る。大納言佐局、「あなあさまし、それは女院にて渡らせ給ふぞ、過ち仕るな」と申されたりければ、判官に申して、急ぎ御所の御舟に移し奉る。さて大納言佐局は内侍所の御からうどを取つて、海に入らんとしたまひけるが、袴の裾を舷に射つけられて、氣惑ひ仆れ給ひけるを、武士ども取り止め奉る。その後御からうどの錠をねぢ切つて、御蓋を既に開かんとす。忽ちに目くれ、鼻血たる。平大納言時忠卿は、生捕にせられておはしけるが、「あれはいかに、内侍所にて渡らせ給ふぞ。凡夫は見奉らぬことぞ」と宣へば、兵ども舌を振つて、恐れおのゝく。その後判官、時忠卿に申し合せて、元の如くからげ納め

大臣殿父子平宗盛、清宗

右衛門督清宗

奉らる。

さる程に門脇平中納言教盛・修理大夫經盛・兄弟手に手を取り組み、鎧の上に錨を負ひて、海にぞ沈み給ひける。小松新三位中將資盛、同じき少將有盛・從弟の左馬頭行盛も、手に手を取り組み、これも鎧の上に錨を負ひて、一緒に海にぞ入り給ふ。人々はかやうにし給へども、大臣殿父子は、さもし給はず、舷に立ち、四方見廻しておはしければ、平家の侍ども、あまりの心憂さに、側をつと走り通るやうにて、先づ大臣殿を海へがばと突き入れ奉る。これを見て右衛門督、やがて續いて飛び入り給ひぬ。人々は鎧の上に、重き物を負うたり、抱いたりして、入ればこそ沈め。この人親子はさもし給はず、なまじひに水練の上手にておはしければ、大臣殿は、右衛門督沈まばわれも沈まん、助からばわれも共に助からんと思ひ、互に目を見か

はして、彼方此方へ泳ぎありき給ひけるを、伊勢三郎義盛、小舟をつと漕ぎ寄せて、先づ右衛門督を熊手にかけて引き上げ奉る。　大臣殿いとど沈みもやり給はざりしを、一緒に取上げ奉りてけり。　乳母子の飛驒三郎左衛門景經、この由を見奉つて、「わが君取り奉るは何者ぞ。」とて、小舟に乘り、義盛が船に押並べて乘り移り、太刀を拔いて打つてかゝる。　義盛あぶなく見えける所に、義盛が童、主を討たせじと中に隔たり、三郎左衛門に打つてかゝる。　三郎左衛門が打つ太刀に、義盛が童、胄の眞向う打割られて、二の太刀に首打落さる。義盛なほ危く見えけるを、隣の船より堀彌太郎親經、能つ引いてひやうと放つ。　三郎左衛門、內胄を射させてひるむ所に、堀彌太郎、義盛が船に乘り移り、三郎左衛門に組んで伏す。　堀が郎等やがて續いて乘り移り、三郎左衛門が腰の刀をぬき、鎧の草摺引上げて、つか

能登殿
能登守平敎經

も拳も通れ〳〵と、三刀刺して首を取る。　大臣殿は、乳母子が目の前にて、かやうになるを見給ひて、如何ばかりのことをか思はれけん。

凡そ能登殿の矢先に廻るものこそなかりけれ。　敎經は今日を最後とや思はれけん、赤地の錦の直垂に唐綾縅の鎧著て、鍬形打つたる胄の緒をしめ、いか物作の太刀を佩き、二十四指いたる切斑の矢負ひ、滋籐の弓持つて、さしつめ引きつめさんざんに射給へば、者ども多く手負ひ射殺さる。　矢種皆盡きければ、黑漆の大太刀、白柄の大薙刀左右に持つて、さんざんに薙いで廻り給ふ。　新中納言知盛卿、能登殿のもとへ使者を立てて、「いたく罪なつくり給ひそ。　さりとてはよき敵かは。」と宣へば、能登殿、「さては大將に組めござんなれ。」とて、打物莖短に取り、艫舳にさんざんになぎ廻り給ふ。　されども

判官を見知り給はねば、物具の能き武士をば、判官かと目をかけて、飛んでかゝる。判官も内々面に立つやうにはし給へども、とかくちがへて能登殿には組まれず。されどいかがはし給ひたりけん、判官の船に乗りあたり、あはやと目を懸けて飛んでかゝる。判官叶はじとや思はれけん、薙刀をば弓手の脇にかい挾み、御方の船の二丈ばかりのきたりけるに、ゆらりと飛び乗り給ひぬ。能登殿、早業や劣られたりけん、續いても飛び乗り給はず。

能登殿、今はかうとや思はれけん、太刀・薙刀をも海へ投げ入れ、冑も脱いで捨てられけり。鎧の袖、草摺をもかなぐり捨て、胴ばかり著て、大童になり、大手を擴げて、船の屋形に立ち出で、大音聲をあげて、「源氏の方にわれと思はん者あらば、寄つて教經組んで生捕にせよ。鎌倉へ下り、兵衞佐に物一言いはんと思ふなり。寄れや寄れ」と宣へども、寄る者一人もなかりけり。

こゝに土佐の國の住人、安藝郷を知行しける安藝大領實康が子に、安藝太郎實光とて、凡そ二三十人が力あらはしたる大力の剛の者、われにちつとも劣らぬ郎等一人具したりけり。弟の次郎も、普通には勝れたる兵なり。かれ等三人寄り合ひて、たとひ能登殿心こそ剛におはすとも、何程のことかあるべき。たけ十丈の鬼なりとも、われ等三人が摑みつきたらんに、などか從へざるべきとて、小舟に乗り、能登殿の船に押し竝べて、乗り移り、太刀の鋒整へて、一面に打つてかゝる。能登殿これを見給ひて、先づ眞先に進みたる安藝太郎が郎等に、裾を合せて、海へどうと蹴入れ給ふ。續いてかゝる安藝太郎をば、弓手の脇にかい挾み、弟の次郎をば、馬手の脇に取つて挾み、一しめしめて、「いざうれ己等、死出の山の供せよ」とて、生年二

十六にて、海へつゝとぞ入り給ふ。

新中納言知盛卿は、見るべき程のことは見つ。今は只自害をせんとて、乳母子の伊賀平内左衞門家長を召して、「日頃の契約をば違へまじきか。」と宣へば、「さる事候。」とて、中納言殿にも鎧二領著せ奉り、わが身も二領著て、手に手を取り組み、一緒に海にぞ入り給ふ。これを見て、當座にありける二十餘人の侍ども、續いて海にぞ沈みける。されどもその中に、越中次郎兵衞・上總五郎兵衞・悪七兵衞・飛驒四郎兵衞などは、何としてかは遁れたりけん、そこをも終に落ちにけり。海上には赤旗・赤印など切り捨て、かなぐり捨てたりければ、立田川のもみぢ葉を、嵐の吹き散らしたるに異ならず。汀に寄する白波は、薄紅にぞなりにける。主もなき空しき船どもは、潮に引かれ風に從ひて、いづちをさすともなく、ゆられ行くこそ悲しけれ。

一〇　六代

（卷十一）

さる程に北條四郎時政は、鎌倉殿の御代官に、都の守護して候はれけるが、「平家の子孫といはん人、男子に於ては、一人も洩らさず尋ね出したらん輩には、所望は請ふによるべし。」と披露せらる。京中の上下、案内は知つたり、勸賞蒙らんとて、尋求むるこそうたてけれ。かゝりしかばいくらも尋出されたり。下臈の子なれども、色白くみめよきをば、あれは何の中將殿の若君、かの少將殿の君達などいふ間、父母歎き悲しめども、あれは乳母が申し候、これは介錯の女房がなんど申して、無下に幼きをば水に入れ、土に埋み、少しおとなしきをば、押殺し刺殺す。母の悲、乳母が歎、譬へん方ぞなかりける。

北條も子孫さすが廣ければ、これをいみじとは思はねども、世に從ふ習なれば力及ばず。

中にも小松三位中將維盛卿の若君、六代御前とて、年も少しおとなしくましまします。その上、平家の嫡々にておはしければ、いかにもして取り奉つて失はんとて、手を分けて尋ねけれども、求めかねて、既に空しく下らんとしける所に、ある女房の六波羅に參つて申しけるは、「これより西、遍照寺の奥、大覺寺と申す山寺の北、菖蒲谷と申す所にこそ、小松三位中將維盛卿の北の方、若君・姫君、忍びてましますなれ。」といひければ、北條嬉しき事をも聞きぬと思ひ、かしこへ人を遣して、その邊を窺はせけるほどに、ある坊に女房達數多、幼き人々、ゆゝしく忍びたる體にて住まはれたり。籬の隙よりのぞいて見れば、白き犬の子の庭へ走出でたるを捉らんとて、世に美しき若君の續いて出で給ひけるを、乳母の女房とおぼしくて、「あなあさまし、人もこそ見參らせ候へ。」とて、急ぎ入れ奉る。これぞ一定それにてましますらんと思ひ、急ぎ走り歸つて、この由申しければ、次の日北條、菖蒲谷を打圍み、人を入れて申されけるは、「小松三位中將維盛卿の若君、六代御前のこれにまします由承つて、鎌倉殿の御代官として北條四郎時政が御迎へに參つて候。疾く〳〵出しまゐらせ給へ。」と申されければ、母上夢の心地して、つや〳〵物をも覺え給はず。齋藤五・齋藤六、この邊を走り廻りて窺ひけれども、武士ども四方を打圍みて、いづかたより出しまゐらすべしとも覺えず。

母上は若君をかゝへ奉つて、「只われを失へや。」とて、をめき叫び給ひけり。乳母も女房も、御前に倒れ伏し、聲も惜しまずをめき叫ぶ。日頃は物をだに高くいはず忍びつゝ、隱れ居たりしかども、今は家

の内にありとあるもの、聲を揃へて泣き悲しむ。北條も岩木ならねば、さすがあはれに覺えて、涙をおさへつゝくづくとぞ待たれける。やゝあつて、又人を入れて申されけるは、「世も未だ靜まり候はねば、しどけなき御事もぞ候はんずらん。時政が御迎へに參つて候。別の仔細は候まじ。疾く〳〵出しまゐらせ給へ。」と申されければ、若君、母上に申させ給ひけるは、「遂に遁るまじく候上、早々出させおはしませ。武士どもの打入つて搜す程ならば、なか〳〵うたてげなる御有樣どもを見えさせ給ひ候はんずらん。たとひ罷り候とも、しばしもあらば、北條とかやに暇請ひてかへりまゐり候はん。いたくな歎かせ給ひ候ひそ。」と慰め給ふこそいとほしけれ。さてしもあるべきことならねば、母上は若君に、泣く〳〵御物著せまゐらせ、御髮かきなでて、既に出しまゐらせんとし給ひけるが、黑木の珠數の小さく美しきを取出して、「相構へて、これにて、いかにもならんまで念佛して極樂へ參れよ。」とてぞ奉らる。若君これを取らせ給ひて、「母上には、今日既に別れまゐらせ候ひぬ。今はいかにもして父のましますに所へこそ參りたけれ。」と宣へば、妹の姫君の生年十になり給ひけるが、われも參らんとて、續いて出で給ひけるを、乳母の女房取留め奉る。六代御前今年は十二になり給へども、世の人の十四五よりもおとなしく、みめ姿美しく、心ざま優におはしければ、敵に弱氣を見えじとて抑ふる袖の間よりも餘りて涙ぞこぼれける。さて御輿に召し給ふ。武士ども打圍みて出でにけり。齋藤五・齋藤六も、御輿の左右につきてぞ參りける。北條乘替どもをおろして、馬に乘れといへども乘らず。大覺寺より六波羅まで、徒跣にてぞ參りたる。母上、乳母の女房、天に仰ぎ地に俯して、もだ

え焦れ給ひけり。

母上、乳母の女房に宣ひけるはさこの日頃、平家の子供取集め、水に入れ、土に埋み、或は押殺し、刺殺し、さまざまにして失ふ由聞ゆなれば、わが子をば何として失はんずらん。年も少しおとなしければ、定めて首をこそ斬らんずらめ。人の子は乳母なんどの許に遣して、時々見ることもあり。それだにも恩愛の道は、悲しき習ぞかし。況やこれは生落してより以來、一日片時も身を放たず、人も持たぬ子を持ちたるやうに思ひ、朝夕二人の中にて育てしものを、頼みをかけし人に飽かで別れて後は、二人をうらうへに置いてこそ慰みしに、今ははや一人はあれども、一人はなし。今日より後はいかがせん。この三年が間、夜晝肝魂を消して思ひ設けたることなれども、さすがに昨日今日とは思ひも寄らず。日頃は長谷觀音を、さりともとこそ頼み奉りしに、終に捉られぬることの悲しさよ。只今もや失ひつらん」とかきくどき、袖を顔に押當てて、さめざめとぞ泣かれける。夜になれども胸せきあぐる心地して、露もまどろみ給はざりしが、やゝあつて、乳母の女房に宣ひけるは、「只今ちとまどろみたりつる夢に、この子が白き馬に乘つて來りつるが、『餘りに御戀ひしく思ひまゐらせ候程に、しばしの暇請ひて參つて候』とて、側についつい居て、何とやらん世に怨めしげにてありつるが、幾程なくて打驚かされ、側をさぐれども人もなし。夢だにもしばしもあらで、やがて覺めぬることの悲しさよ」とぞ、泣く〳〵語らひ給ひける。

さる程に長き夜をいとどあかしかね、涙に床も浮くばかりなり。かぎりあれば鷄人曉を唱へて夜もあけぬ。齋藤六歸り參りたり。母上「さていかにや」と問ひ給へば、「今までは別の御事も候はず。こ

れに御文の候」とて、取出して奉る。これを披けて見給ふに、「今までは別の仔細も候はず。さこそ御心もとなく思召され候らん。いつしか誰々も、御戀ひしくこそ思ひまゐらせ候へ」と、おとなしやかに書き給へり。母上、これを顔に押當てて、とかくのことも宣はず、引きかづいてぞ伏し給ふ。かくて時刻も遙に推移りければ、齋藤六、「時の程も覺束なく候。御返事賜はつて、歸りまゐり候はん」と申しければ、母上泣く〳〵御返事書いてぞ賜ひてける。齋藤六暇申して出でにけり。

乳母の女房、せめての心のあられずさにや、大覺寺をば紛れ出で、その邊を足に任せて泣き歩くほどに、或人の申しけるは、「これより奥、高雄といふ山寺の聖、文覺坊と申す人こそ、鎌倉殿のゆゝしき大事の人に思はれまゐらせてまし〳〵けるが、上臈の子を弟子にせんとて、ほしがらるゝなれ」といひければ、乳母の女房、嬉しき事をも聞きぬと思ひ、直に高雄へ尋ね入り、聖に向ひまゐらせて、泣く〳〵申しけるは、「乳の中より抱き上げ奉り、おほしたてまゐらせて、今年は十二になり給ひつる若君を、昨日武士に捉へられて候なり。御命を請ひ受けて御弟子にさせ給ひなんや」とて、聖の御前に倒れ伏し、聲も惜しまずをめき叫ぶ。まことにせんかたなげにぞ見えたりける。

聖も無慙に思ひて、事の仔細を問ひ給ふ。やゝあつて起上り、涙をおさへて申しけるは、「小松三位中將維盛卿の北の方に、御親しくまします人の、若君を養ひまゐらせて候ひつるを、もし中將殿の君達とや人の申して候やらん、昨日武士に捉られて候なり」とぞ語りける。聖「さてその武士をば誰といふやらん」。「北條四郎時政とこそ

名のり申し候ひつれ」。聖「いでさらば、尋ねて見ん」とてつき出でぬ。乳母の女房、この言葉を頼むべきにはあらねども、昨日武士に捉られてより以來、餘りに思ふばかりもなかりつるに、聖のかく宣へば、少し心を取延べて、急ぎ大覺寺へぞ參りける。母上「さてわごぜは、身を投げに出でぬるやらん、われも如何なる淵川へも身を投げばやなど思ひたれば」とて、事の仔細を問ひ給ふ。乳母の女房、聖の申されつるやうを、細々と語り申したりければ、あはれその聖の御坊の、この子を請ひ受けて、今一度われに見せよかしとて、嬉しさにも只盡きせぬものは涙なり。

その後、聖、六波羅に出で、事の仔細を問ひ給ふ。北條申されけるは、「鎌倉殿の仰せには、平家の子孫といはん人、男子に於ては一人も洩らさず尋ね出し失ふべし。中にも小松三位中將維盛卿の子息六代御前とて、年も少しおとなしくまします。その上平家の嫡々なり、故中御門中納言成親卿の女の腹にありと聞く。如何にもして捉り奉つて、失ひまゐらせよ」と、仰せを蒙つて候ふ間、末々の君達をば、少々とり奉つては候へども、この若君の在所を、いづくとも知りまゐらせずして、既に空しく下らんと仕る所に、思はざる外に、一昨日聞き出しまゐらせて、昨日これまで迎へ奉つて候へども、餘りに美しうまし〳〵候ほどに、未だともかくもし奉らで置き奉つて候」と申されければ、聖「いでさらば、見參らせん」とて、若君の渡らせ給ふ所に參つて見給へば、二重織物の直垂に、黑木の珠數手にぬき入れておはします。髮のかゝり、姿、骨柄、誠にあてに美しく、この世の人とも見え給はず。今夜打解けて、まどろみ給はぬかとおぼしくて、少し面瘠せ給ふを見參らするにつけても、いとどらうたくぞ思は

れける。

若君聖を見給ひて、いかがゞ覺しけん、涙ぐみ給へば、聖もそぞろに墨染の袖をぞ濡らされける。末の世にはいかなる怨敵となり給ふといふとも、これをばいかでか失ひ奉るべきと思はれければ、北條に向ひて宣ひけるは、「先世の事にや候らん、この若君を見參らせ候へば、餘りにいとほしう思ひまゐらせ候。何か苦しく候べき、二十日の命をのべて給べ。」鎌倉へ下つて申し宥して奉らん。その故は、聖、鎌倉殿を世に立て奉らんとて、院宣伺ひに京へ上るが、案内も知らぬ富士川の裾に、夜、わたりかゝつて、既に押流されんとしたりし事、又たかし山にて引剝にあひ、辛き命ばかり生きつゝ、福原の牢の御所に參つて、院宣申出して奉りし時の御約束には、「たとひいかなる大事をも申せ、聖が申さんずることをば、賴朝一期が間は叶へん」とこそ宣ひしか。その外度々の奉公をば、且つ見給ひしことぞかし。事新しく始めて申すべきにあらず。契を重んじて命を輕んず。鎌倉殿に受領神つき給はずば、よも忘れ給はじ」とて、やがてその曉ぞ立たれける。

齋藤五・齋藤六、聖を生身の佛の如くに思ひて、手を合せて涙を流す。これ等、又大覺寺へ參つて、この由申しければ、母上、いかばかりか嬉しく思はれけん。されども鎌倉殿の計らひなれば、いかがあらんずらんと思はれけれども、二十日の命の延び給ふにぞ、母上、乳母の女房、すこし心を取り延べて、偏に長谷觀音の御助なればにやと、賴もしくぞ思はれける。かくてあかし暮らさせ給ふ程に二十日の過ぐるは夢なれや。聖も未だ見え給はず。こはされば何としつることどもぞやと、なか〳〵心苦しくて、今更又もだえこがれ給ひ

けり。北條も聖の二十日と申されし約束の日數も過ぎぬ。今は鎌倉殿御宥されなきにこそあるなれ。さのみ在京して、年を暮らすべきにあらず、今は下らんとて、ひしめきけり。

さる程に同じき十二月十七日の曉、北條四郎時政、若君具し奉つて、既に都を立ちにけり。齋藤五・齋藤六も、御輿の左右についてぞ參りける。北條、乘替どもおろして、馬に乘れといへども乘らず。「最後の御供にて候へば、苦しくも候はず。」とて、血の涙を流して、徒跣にてぞ下りける。若君はさしも離れ難くおぼえける母上、乳母の女房にも別れ果てて、住みなれし都をば、雲ゐのよそに顧みて、今日をかぎりの東路に赴きて、遙々と下られけん心の中推量られてあはれなり。

駒を早むる武士あれば、わが首斬らんかと肝を消し、物いひかはす者あれば、すは今やと心をつくす。四宮河原と思へども、關山をも打過ぎて、大津の浦にもなりにけり。粟津の原かと窺へば、今日もはや暮れにけり。國々宿々打過ぎ、打過ぎ下り給ふ程に、駿河の國にもなりしかば、若君の露の御命今日を限りとぞ見えし。

千本松原といふ所に、御輿かきすゑさせ、「若君おりさせ給へ。」とて敷皮敷いてすゑ奉る。北條急ぎ馬より飛んで下り、若君の御側近く參つて申されけるは、「若し道にて聖にや行遭ひ候と、これまで具足し奉つて候へども、山の彼方までは、鎌倉殿の御心中をも計り難く候へば、近江の國にて失ひ參らせたる由、披露仕り候はん。一業所感の御身なれば、唯申すともよも叶はせ給ひ候はじ。」と申されければ、若君とかくの返事にも及び給はず。齋藤五・齋藤六を召して宣ひけるは、「あなかしこ、汝等都へ上り、わが道にて斬られたりなど申

すべからず。その故は遂にはかくれあるまじけれども、正しくこの有様を聞き給ひて、歎き悲しみ給はば、後世の障ともならんずるぞ。鎌倉まで送りつけて上りたる由申すべし。」と宣へば、二人の者ども涙をはら〳〵と流す。やゝあつて齋藤五、涙を抑へて申しけるは、「君の神にも佛にもならせ給ひなん後、命生きて、再び都へ歸り上るべしとも存じ候はず。」とて、又涙をおさへて伏しにけり。

若君今はかうと見えし時、御髪の肩にかゝりけるを、小さく美しき御手をもつて、前へ搔越させ給ふを、守護の武士ども見參らせて、「あないとほし、未だ御心のましますぞや。」とて、皆鎧の袖をぞ濡しける。その後若君西に向ひて手を合せ、高聲に念佛十念唱へさせ給ひつつ、頸を延べてぞ待たれける。狩野三郎近俊、斬手に選まれ、太刀を引きそばめ、左の方より若君の御後に立廻り、既に斬らんとしける

が、目もくれ心も消え果てて、いづくに刀を打ちつくべしとも覺えず。前後不覺に覺えければ、「仕るとも存じ候はず、他人に仰せつけられ候へ。」とて、太刀を捨ててぞのきにける。「さらばあれ斬れ。」「これ斬れ。」とて、斬手を選ぶ所に、こゝに墨染の衣著たりける僧一人、月毛なる馬に乘つて、鞭を打つてぞ馳せたりける。その邊の者ども、「あないとほし、あの松原の中にて、世に美しき若君を、北條殿の只今斬り奉らるゝぞや。」とて、者どもひし〳〵と走り集りければ、この僧心もとなさに鞭を上げて招きけるが、猶も覺束なさに、著たる笠をぬいで、さしあげてぞ招きける。

北條仔細ありとて待つ所に、この僧程なく馳せきたり、いそぎ馬より飛んで下り、「若君請ひ受け奉りたり。」鎌倉殿の御敎書これにあり。」とて取出す。北條これを開いて見るに、「まことや、小松三位中將

維盛卿の子息六代御前尋出されて候。然るを、高雄の聖、文覺坊の暫し請ひ受けんと候。疑をなさず預けらるべし。北條四郎殿へ、賴朝」とあそばして御判あり。北條押返し押返し、二三返讀みて、「神妙、神妙」とてさし置かれければ、齋藤五・齋藤六はいふに及ばず、北條の家子・郎等どもも、皆喜の涙をぞ流しける。（卷十二）

國文新副讀本 上卷 終

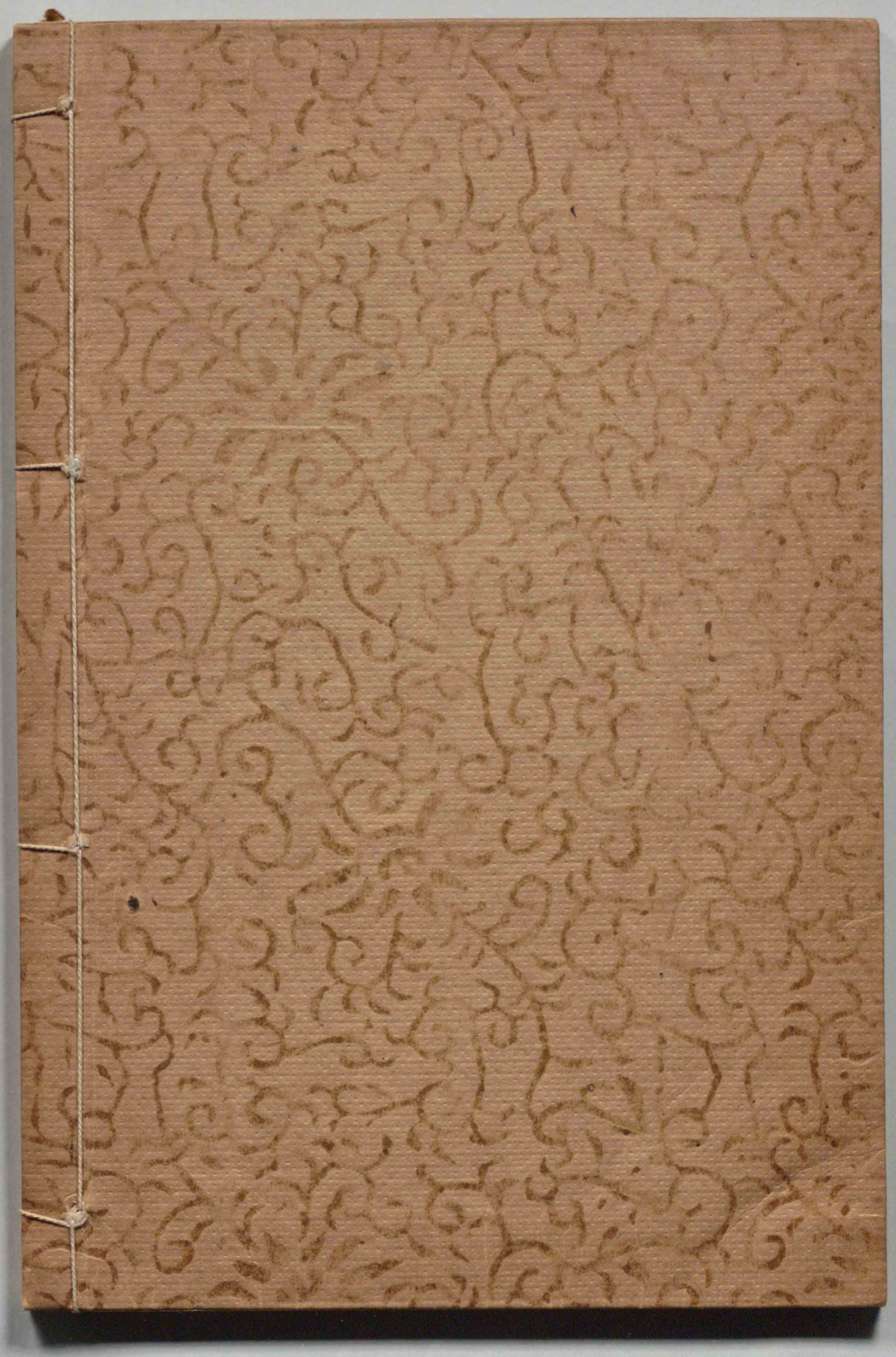
大正十三年四月二十八日印刷
大正十三年五月一日發行
大正十四年十一月十五日訂正再版印刷
大正十四年十一月十八日訂正再版發行

國文新副讀本
定價 上卷 金參拾錢 中卷 金參拾四錢 下卷 金參拾五錢

昭和五年度臨時
定價 上卷 金四拾九錢 中卷 金五拾五錢 下卷 金五拾七錢

不許複製

編者　藤村作
編者　島津久基
發行者　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地　佐藤正叟
印刷者　東京市京橋區弓町二十五番地　高橋郁
（三協印刷株式會社印刷）

發行所　東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替口座東京二九五〇七番
至文堂
電話青山（長）三五四六番　四三四三番

弊堂發行の教科書は供給差支無き樣常に澤山製本準備致居候間若し各地書店に品切れ等にて御差支有之候節は何卒弊堂へ直接御注文被下度直に送本可申上候